

鞠智城跡

— 第37次調査報告 —

深迫門跡の調査

2023

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館

序文

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、ヤマト政権により築城された古代山城の一つです。『続日本紀』文武天皇2年（698年）条の修繕記事を初見とし、その後、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』など「六国史」に記述がある全国でも有数の重要な遺跡として、平成16年（2004年）2月27日付けで国史跡に指定されました。

熊本県教育委員会では、昭和42年度（1967年度）からその構造解明に向けた発掘調査を実施し、これまでに八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡、3基の城門跡、貯水池跡等、重要な遺構を検出しています。発掘調査の進展に伴い、銅造菩薩立像、木簡等、鞠智城の築城や役割に迫る遺物も相次いで発見されました。

熊本県教育委員会は、平成28年（2016年）3月に『第3次鞠智城保存整備基本計画』を策定し、令和2・3年度（2020・2021年度）にはこの基本計画に基づいて、鞠智城跡の城門である深迫門を調査対象として第35・36次調査を実施しました。本報告は、その第35・36次調査の課題を受けて、引き続き深迫門跡を対象として実施した第37次調査の成果報告書です。

なお、来年度からは、これまでの調査成果を取りまとめて城門構造の研究を推進するとともに、鞠智城跡の活用のための整備について検討してまいります。これらの調査及び研究の成果が学術的資料としてのみならず、多くの県民の皆様の埋蔵文化財保護に対する理解を深めていただくための資料となれば幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた関係各機関、並びに調査に対する指導、助言を頂いた諸先生、そして地元の皆様に対し心より感謝を申し上げます。

令和5年（2023年）3月10日

熊本県教育長 白石 伸一

例 言

- 1 この報告は、熊本県教育委員会が調査主体となり令和4年度（2022年度）に文化庁国庫補助事業として実施した鞠智城跡第37次発掘調査報告である。
- 2 この発掘調査は、熊本県立裝飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館が担当し、令和4年（2022年）5月27日から令和4年（2022年）8月31日まで熊本県菊池市木野字深迫で実施した。
- 3 発掘担当者は、文化財整備交流課 主幹 亀田 学である。
- 4 発掘作業のうち、遺構実測は株式会社埋蔵文化財サポートシステム、空中写真撮影はヤマガ空撮に委託した。
- 5 整理作業は、歴史公園鞠智城・温故創生館で実施し、亀田が担当した。
- 6 整理作業のうち、遺構トレースは株式会社埋蔵文化財サポートシステム、自然科学分析（14C年代測定）は株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 7 遺物、写真、図面等の埋蔵文化財資料は、歴史公園鞠智城・温故創生館が保管している。
- 8 この報告の編集は、亀田が担当した。

凡 例

- 1 この報告の地図は、国土地理院2万5千分の1地形図及び山鹿市都市計画図（5千分の1）をもとに作成した。
- 2 実測図は、令和元年度（2019年度）に株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した基準点測量及び水準測量の測量成果に基づき作成した。平面直角座標は世界測地系であり、方位は座標北である。なお、既往調査の実測図と対比できるよう日本測地系座標を併記した。レベル（L=）は標高を示す。
- 3 遺構図及び地形図の縮尺は、各図に付したスケールに表している。
- 4 遺物実測図は、縮尺1/1で実測し、弥生土器、土師器及び須恵器は縮尺1/2、瓦は1/3で掲載している。
- 5 土層及び遺物の色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠して記録した。なお、土層は土色計（コニカミノルタ SPAD-503）で測定している。

目 次

序文・例言・凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の過程	2
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 深迫門跡におけるこれまでの調査概要	8
第1項 深迫門北側土壘線の調査	8
第2項 深迫門南側土壘線の調査	8
第3項 登城道の調査	9
第2節 調査の方法	9
第3節 令和4年度（2022年度）第37次調査の成果	10
第1項 調査の概要	10
第2項 37トレンチの調査	10
第3項 35-3トレンチの調査	11
第4項 28-11トレンチの調査	13
第5項 28-12トレンチの調査	14
第6項 28-6トレンチの調査	14
第4章 放射性炭素年代測定	16
第1節 はじめに	16
第2節 試料と方法	16
第3節 結果	16
第4節 考察	17
第5章 まとめ	18
第1節 門周辺の土壘構築の方法と変遷	18
第1項 断面から見た門周辺の構造について	18
第2項 37トレンチの平面から見た門周辺の築造技術	19
第3項 土壘の規模と上部の版築について	19
第2節 登城道について	20

図面

写真図版

報告書抄録・奥付

図 面 目 次

図 1 鞠智城跡 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000) 21	図11 深迫門跡 28、35、37トレンチ平面図 (S=1/80) 30
図 2 城門跡 位置図 (1/6,000) 22	図12 37トレンチ (28-11・12トレンチ)、35-3・ 28-6トレンチ平面図 (1/50) 31
図 3 35-1・35-2トレンチ深迫門跡 周辺地形図 (1/500) 23	図13 35-3トレンチ西壁土層断面図 (S=1/40) 32
図 4 35-1・35-2トレンチ・35トレンチ上層土層 断面図 (S=1/80) (「鞠智城跡第35・36次調査 報告」2022 図13・14) 24	図14 35-3トレンチ東壁土層断面図 (S=1/40) 33
図 5 深迫門跡 版築土壌土層断面図 1 (S=1/150) (「鞠智城跡II」2012 第318図) 25	図15 28-11トレンチ西壁土層断面図 (S=1/40) 34
図 6 深迫門跡 28-4トレンチ土層断面図 (S=1/80) (「鞠智城跡II」2012 第322図) 26	図15-2 28-11トレンチ西壁土層断面図色注記 35
図 7 深迫門跡 28-5トレンチ平面図 (S=1/100) (「鞠智城跡第35・36次調査報告」2022 図20) 26	図16 28-11トレンチ 北・東・南壁土層断面図 (S=1/40) 35
図 8 深迫門跡 28-5トレンチ西壁土層断面図 (S=1/50) (「鞠智城跡第35・36次調査報告」 2022 図23) 27	図17 P-4土層断面図2 (S=1/40) 35
図 9 深迫門跡 石列・柱穴・土層断面図 (S=1/80) (「鞠智城跡II」2012 第321図) 28	図18 28-12トレンチ西壁土層断面図 (S=1/40) 36
図10 深迫門跡 周辺第37次調査時現況トレンチ 配置図 (1/400) 29	図19 28-12トレンチ東壁土層断面図 (S=1/40) 36
	図20 35トレンチ北壁 (1~6)・集石内 (7)・ 28-6トレンチ (14・15)遺物実測図 (土器 (1/2)・瓦 (1/3)) 36
	図21 28-6(35-4)トレンチ西壁土層断面図 (1/40) 37
	図22 35トレンチ上層、35-3トレンチ、28-6 トレンチ土層合成断面模式図 (S=1/100) 38

写 真 目 次

1 第37次発掘調査調査区遠景 (南東から) 39	12 28-6トレンチ版築断面西壁版築断面検出状況 (東から) 43
2 調査区遠景 (北西から) 39	13 28-6トレンチ南側断面検出状況 (南東から) 44
3 37トレンチ近景 (南から) 40	14 28-12トレンチ検出状況 (南東から) 44
4 35-3トレンチ石積み・版築検出状況 (南東から) 40	15 28-11トレンチ北端 (P1東から) 45
5 37トレンチ検出状況 (東から) 41	16 35-3トレンチ石積み石出土状況 (南から) 45
6 35-3トレンチ石積み・西壁版築断面検出状況 (南から) 41	17 第37次調査区全景 (東から) 45
7 35-3トレンチ石積み・版築検出状況 (南東から) 41	18 35トレンチ上層出土遺物 1 46
8 28-6トレンチ検出状況 (北から) 41	19 35トレンチ上層出土遺物 2 46
9 北側土壌・35-3・37・28-5トレンチ検出状況 (南から) 42	20 35トレンチ上層集石付近出土遺物 46
10 37トレンチ検出状況 (南から) 42	21 35トレンチ上層集石凹面布目・板状压痕 46
11 28-11トレンチ上層 (37トレンチ西壁)版築断面 検出状況 (北東から) 43	22 28-6トレンチ出土遺物 46
	23 35-3トレンチ出土遺物 46

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

鞠智城跡は熊本県の北部、山鹿市菊鹿町南部から菊池市北西部にかけて所在する古代山城である。

『続日本紀』文武天皇2年（698年）5月の条にみえる「令大宰府縷治大野・基跡・鞠智三城」という修繕記事を初見とし、『日本文德天皇実録』天安2年（858年）2月「肥後國言。鞠智城院兵庫鼓自鳴。」6月の条「肥後國鞠智城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。」、『日本三大実録』元慶3年（879年）3月の条に「肥後國菊地城院兵庫戸自鳴。」という記事が見られ、城名の記載がみられる。いくつかの谷を取り囲むように土塁を築き巡らした朝鮮三国時代に起源を持ち、歴史書にも記載されている「朝鮮式山城」である。

現在は、熊本県が平成6年度（1994年度）から始めた保存整備事業により、八角形鼓櫓、米倉、兵舎、板倉が復元され、平成14年度（2002年度）にはガイダンス施設「温故創生館」が併設され歴史公園として県民に親しまれている。また、平成16年（2004年）2月27日に国の史跡に指定された。

鞠智城跡の本格的な発掘調査は、熊本県教育委員会が昭和42～44年度（1967～1969年度）に実施した第1～4次調査に始まる。これは当時、熊本女子大学教授であった乙益重隆を団長とする「鞠智城調査団」によるものであつた。その後、昭和62年度（1987年度）の第10次調査からは、熊本県教育委員会が文化庁国庫補助事業として毎年度継続的に調査を実施してきた。

その結果、長者原地区・長者山地区で国内の古代山城では類例をみない「八角形建物跡」をはじめとする掘立柱建物44棟、礎石建物跡21棟、礎石・掘立柱併用建物跡3棟の全数72棟の建物跡が検出されている。約5,300m²という広大な面積をもつ貯水池跡、版築盛土による土塁、そして通水溝を伴う石壁など城の構造解明に係る貴重なデータが蓄積してきた。貯水池跡からは、「秦人忍口五斗」と書かれた荷札木簡や鍔や斧の柄や建築部材等の他、瓦や須恵器等の土器を出土していたが、平成20年度（2008年度）には、貯水池跡池尻部から百濟系銅造菩薩立像が出土し、築造の指導者や築城時期を考える上で重要な資料を提供した。

現在の発掘調査は、城門跡、土塁線、貯水池の構造解明を目的とする調査方針に基づき、概ね20年間の事業期間を念頭に年次計画を掲げた『第3次鞠智城跡保存整備基本計画』（平成28年3月策定）に基づき実施している。

平成28年（2016年）4月に熊本地震が発生したことから同計画の開始年度を平成30年度（2018年度）に変更し、平成30年度（2018年度）及び令和元年度（2019年度）に堀切門跡の調査を実施した。その後、本計画に基づき令和2・3年度（2020・2021年度）の2か年にわたり深迫門跡の構造把握を目的として鞠智城跡保存整備検討委員会の指導・助言を得ながら第35・36次調査を実施した。

その結果、門推定地の北側の土塁下層から土塁構築時の基底部と考えられる3段以上の積み石を確認した。また、その前面に整地土もしくは、造成に伴う遺構と考えられる版築を確認できることから、その性格及び門の登城道等の基底面の変遷などを確認することが課題となった。

そのため、令和4年度（2022年度）に深迫門跡の調査を第37次発掘調査として実施した。

第2節 調査の組織

発掘調査は下記の組織で行った。

第37次調査（令和4年度（2022年度））

調査主体者 熊本県教育委員会 教育長 白石 伸一

調査責任者 廣瀬 泰之（熊本県立装飾古墳館長）

調査総括 長谷部 善一（熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館長）、

宮崎 敬士（歴史公園鞠智城・温故創生館文化財整備交流課長）

調査事務 八並 健児（熊本県立装飾古墳館総務課長）、本山愛実（主任主事）

西 清也（文化財整備交流課主任主事）、島田真帆（主事）

調査担当 亀田 学（文化財整備交流課主幹）

発掘調査作業員

上田 則行、河津 祐太郎、後藤 常夫、藤永 一也、守井 昭雄
鞠智城跡保存整備検討委員会（令和4年度）
佐藤信（くまもと文学・歴史館館長、東京大学名誉教授）、小畠弘己（熊本大学大学院教授）、亀田修一（岡山理科大学特任教授）、小西龍三郎（元九州造形短期大学教授）、坂上康俊（九州大学名誉教授）、田中哲雄（元東北芸術工科大学教授）、山尾敏孝（熊本大学名誉教授）
調査指導及び協力者
長直信（文化庁文化財第二課文化財調査官）、堀江潔（佐世保工業高等専門学校教授）、西住欣一郎、阿南寧・西坂知絵（菊池市教育委員会）、宮崎歩・佐治健一（山鹿市教育委員会）、帆足俊文・村崎孝宏・矢野裕介・花田杜崎（熊本県教育委員会）
(以上、順不同・敬称略)

第3節 調査の過程

第37次調査（図2・3）

第35・36次調査は、深迫門の構造解明を目的として実施した。第16次調査及び第28次調査の北側壁面の谷部付近より城内側に深迫門が想定されていたため、第16次調査の北壁周辺の調査を実施した。その結果、門推定地の北側の土壘下層から土壘構築時の基底部と考えられる3段以上の積み石を確認した。また、その前面に整地土もしくは、造成に伴う遺構と考えられる版築土を確認できることから、その性格及び門の登城道等の基底面を確認することが課題となつた。

令和3年度（2021年度）第2回鞠智城跡保存整備検討委員会で、令和4年度（2022年度）の深迫門の継続調査について説明し、委員会の了承を得た。

史跡鞠智城跡の現状変更等（発掘調査）について、令和4年（2022年）3月16日付け教文2778号で文化庁長官宛て申請し、令和4年（2022年）4月22日付け4文庁第19号で現状変更等の許可通知を受けた。

埋蔵文化財の発掘調査について、文化財保護法第99条第1項の規定により、令和4年（2022年）5月26日付け教文第467号で熊本県教育長宛て通知するとともに、その内容を菊池市教育長宛て通知した。

第37次発掘調査は、第35・36次調査で検出した土壘基底部の積み石及びその谷側の整地土の性格を確認し、門道及び城門の位置を推定することを目的に令和4年（2022年）5月27日から令和4年（2022年）8月31日まで実施した。

まず、埋戻していた第35・36次調査で実施した35-3トレチの平面を広く検出するためにその東側の第28次調査終了後に埋戻していた遺構面を検出する作業を実施した。周辺に平面位置しか記録がなかった28-11・12を再検出することや28-5トレチにつながる版築に伴う埋板を支える埋柱も確認することも考え、調査期間も考慮してトレチを設定した。ただ、土量が多く夏場の作業であったので作業効率が上がらず、南側の土壘の構造の調査は、28-6トレチの下層を一部確認したのにとどまった。

文化財発見について、文化財保護法第100条第2項で準用する同法第100条第1項の規定により、令和4年（2022年）9月12日付け教文第1483号で菊池警察署長宛て通知するとともに、その内容を菊池市教育長宛て通知した。

（発掘作業の進捗）

- 5月27日（金） 鞠智城跡第37次調査を開始した。休憩所兼道具置き場のためのテントを設営した。暑さや乾燥を防ぐために寒冷紗の設置をするための準備、調査予定地に溜まった排水作業を実施した。
- 5月28日（土） 第36次調査の継続調査と35-3トレチの東側の平面を確認するために埋戻した遺構面を出すために35-3トレチとその周囲の土壘を除去作業した。
- 6月1日（水） 35-3トレチの東側を広げるために第28次調査で埋戻した土の除去作業を開始した。
- 6月3日（金） 35-3トレチの西側の平面の状況を確認するするために北壁上層壁を清掃。土師器数点と弥生時代中期の甕片が出土した。
- 6月7日（火） 28-11トレチを検出した。掘削した深さまで埋戻した土砂を再掘削したプライマリーな層ま

で掘削した。

6月15日（水）28-11トレンチを検出し、再掘削。上部断面にて35-2で検出した版築の状況と比較できる状況になった。28-11トレンチの北端及び南端でピット状の遺構を確認した。樹痕である可能性も含めて断面を精査した。

6月17日（金）35-3トレンチ東側拡張区から土師器小片出土した。深迫門跡調査検討委員会を午後1時30分から午後3時30分まで実施した。文化課の村崎、矢野、花田各氏並びに長谷部温故創生館長、宮崎文化財整備交流課長、亀田が参加した。門周辺の土壌基底部の内側に整地された版築は、内傾しているものの直線的であり、縦まりが悪い土であることから外皮盛土や保護盛土と呼ばれる土に類似することが指摘された。

第37次調査は、門周辺の構造を追求するための調査であり、そのためには、35-3トレンチと28-6トレンチの平面をできるだけ広く検出してその構造を確認する予定であったが、土量が想定したより多かったため、南側土壌（28-6トレンチ）の平面を広げることは困難である状況を確認した。

そこで第37次調査については、門推定地の北側土壌の堰板を支える柱穴群、門道に至る土壌の変換点や門構造に関わる遺構を平面的に検出することを確認した。

6月18日（土）第37次調査区を28-5トレンチの方に拡張した。28次調査の28-12トレンチを検出することと28-5トレンチ北側の堰柱の方の並びを検出するため幅2m程先行して掘削した。

6月28日（火）35-3トレンチ壁面清掃。35-3トレンチ北側には不整合面を観察した。

6月29～31日 第37次調査の調査区を南東に拡張して28-12トレンチを完全に検出できるよう埋戻し土を再掘削した。

7月12日（火）鞠智城跡保存整備検討委員会の前に遺構面精査、ピットを再検出した。35-3とトレンチや28-11トレンチの断面の確認と28-6トレンチも壁面精査を行った。

7月14日（木）令和4年度（2022年度）第1回鞠智城跡保存整備検討委員会が開催された。天候不順のため開会前午後1時30分から参加委員に発掘調査現場を見ていただいた。参加いただいた委員は、小畠弘己（熊本大学大学院教授）、亀田修一（岡山理科大学特任教授）、坂上康俊（九州大学名誉教授）、田中哲雄（元東北芸術工科大学教授）、山尾敏孝（熊本大学名誉教授）である。

亀田修一委員から、3段の積み石の山側の版築は、谷側に傾いているが、直線的であり堰板がないと直線的に版築をすることができない。下部の石積みが段上に整然と積んでおり、ある時期の土壌の壁と考えられる。積み石を基底石として土壌状に版築しているように見えるが、版築の上部が崩落しているためにそのよう見える可能性があり、内側（谷側）に版築し直しているのではないかとの指摘を受けた。

7月15日（金）文化庁文化財第二課（埋蔵文化財部門）文化財調査官長直信氏が専門調査員とし来跡。門周辺の門の造成過程を模式図等でわかりやすく説明できるようにすることが重要であるとの指摘を受けた。

7月17日（日）現地説明会を実施した。午前10時からと午後2時からの2回実施。午前中16名。午後36名の参加があった。堀江潔（佐世保高等専門学校教授）、西住欣一郎（菊池市教育委員会）、岡本真也（前温故創生館文化財整備交流課長）等各氏来跡。熊日新聞鬼東記者取材があった。

7月26日（火）第37次調査で確認したピットの半裁作業を行った。28-6トレンチで下層に幅30cmのトレンチを設定した。南側の土壌が階段状に成形された後に版築されていることを確認した。

35-3トレンチで検出された積み石の背後を確認するために幅30cmのトレンチを設定した。その結果、20cm程の厚さの版築を確認すると共に20cm下に丸石を検出した。積み石の南側は、西側にある丸石を避けて、東側にトレンチ設定した。20cm下に凝灰岩の角礫あり。50cm下に暗褐色のしまった硬い層があることを確認した。それまでの層は版築と考えられる。丸石の面と下層の面2面の文化層があると考えられた。丸石30cm下から土師器出土した。

- 7月27日（水）前日からの28-6トレンチの一部深掘りの掘削中に土壌肩部から花崗岩片が出土した。
- 7月28日（木）12時前後からドローンによる空撮（ヤマガ空撮）、空撮後写真測量による実測図作成のための撮影（17時ころまで撮影）
- 8月3日（水）第2回深迫門跡調査検討委員会を10時分から12時まで実施した。県教育委員会村崎、矢野、花田各氏及び温故創生館長谷部館長、宮崎文化財整備交流課長、亀田が参加。
調査区で出土した柱穴は門を構成する柱の可能性もあることが指摘される。埋板を支える柱の可能性も含めて、配置図をしっかりと作成し、検討する必要があることが指摘された。
委託業者から調査区のオルソ画像データ届いた。
- 8月10日（水）35-3トレンチ土層図面・断面チェック・土色をチェック。オルソ画像で見えにくい部分の土層ラインを追記した。
- 8月12日（金）測量委託業者の埋蔵文化財サポートシステム熊本支店より3Dオルソ画像作成による平面測量データが届き確認した。
- 8月16～21日 35-3土層注記と土層ライン確認した。
- 8月22・23日 28-11トレンチ西壁及びその上層の北側・及び南側への断面見通し実測図の確認作業と土層注記を実施した。
- 8月24日（水）28-12トレンチの土層ラインの確認と土層注記。28-6トレンチの線引き確認・土層注記作業途中まで完了した。
- 8月25日（木）土養による埋戻し作業を開始。28-11、28-12、35-3トレンチが完了。次年度の発掘調査に向けての仮養生を行った。なお、亀田は新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者となつたため、埋戻し作業は宮崎敬士文化財整備交流課長が担当した。
- 8月29日（月）段々煙の壁面（一部）崩落箇所の擁壁作業を完了。全体をブルーシートで養生し、埋戻し作業を完了。
- 8月31日（水）現地にて今後の課題を検討。段々煙の壁面の調査により壁面擁護が困難なためシートを貼った状況にしなければならない状況となつた。今後の整備計画と併せて壁面擁護をどうするか考える必要があることを確認した。
上記の確認後、宮崎から亀田に担当を引き継ぎ、周辺の環境整備を行つて第37次発掘調査を終了した。

（整理作業の進捗）

- 遺物整理は12月に実施した。
図面編集は11月中旬から1月中旬まで実施した。
原稿執筆は12月から1月中旬まで実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（図1）

鞠智城跡は、阿蘇外輪山麓から有明海へと西流する全長71kmを測る菊池川水系の中流域に立地する。城内迫地に溜まつた水は、西側の門である池ノ尾門付近に集まり、塩井川と称する小河川になっており、鞠智城の北西から南北に流れ初田川に流れ込んでいる。さらに初田川の西側には、木野川、さらに西側には上内田川が流れそれぞれ菊池川本流に合流する地形である。

菊池川の中流域には肥沃な菊鹿盆地が広がり、北東部に八方ヶ岳（標高1,052m）がひときわ高く聳える。鞠智城跡は筑肥山地の最高峰八方ヶ岳から南西に延びる丘陵の先端部に形成された「米原台地」と呼ばれる標高約145mの台地上に位置する。この米原台地の南側には菊鹿盆地が広がり、西側は初田川の浸食作用によってできた谷地形に面しているため、周辺の地形から独立した様相を呈している。そのため、標高は約145mと微高地ながらも周辺の眺望は開けており、南側は菊鹿盆地から遠くは熊本市、南西側は金峰山系から雲仙普賢岳、東側は阿蘇外輪山を望むことができる。

西側約30kmには有明海が広がるが、その間を金峰山系に阻まれ、直接有明海を望むことはできない。また、北側には八方ヶ岳を主峰とする1,000m級の山々からなる筑肥山地が横たわっており、地形的に鞠智城跡は北側の山々を背後として、南側を望むロケーションにあるといえる。なお、大宰府政府から鞠智城跡までは南東の方向に直線距離で約62km離れている。

当該地域の基盤層は、菊池川流域の西～北側に位置する筑肥山地では筑後変成岩や花崗岩を基盤として鮮新世から更新世の火山岩類が覆い、標高200m前後の丘陵には主にAso-4と呼ばれる阿蘇火砕流が堆積している。

鞠智城は、南側から東側にかけては、Aso-4と呼ばれる阿蘇山噴火の火砕流堆積物である阿蘇溶結凝灰岩を基盤層としている。南側の南側土壠線や深追門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡等の城門地域、南部斜面地区、南部谷部地区の南半や東側の上原地区や米原の集落地区等が該當する。

それに対して北側から西側、中央部にかけては、花崗岩を基盤層とする。西側土壠線から北側土壠線、貯水池跡地区、72棟の建物が検出された長者山地区・長者原地区、南部谷部地区北側等が該当する。

前者の阿蘇溶結凝灰岩は溶結度が弱く、崩れやすいが加工しやすい性質を持つ。後者の花崗岩は強度がある岩盤であり、門の土台となる唐居敷に利用され、建物の柱を据える礎石や池ノ尾門の石垣や取水・排水の暗渠に使用されている。

菊鹿盆地には河川堆積物に起因する砂礫や粘土で形成する沖積層が分布し、菊池川下流部には沖積平野（玉名平野）が広がっている。

鞠智城は、土壠線や崖線など地形を巧みに利用した外郭線によって囲繞され、その周長は約3.5kmに及ぶ。城内には迫地形を利用した3つの門跡が確認されている。

今回の第37次調査を実施した深追門跡は、鞠智城跡の南東に位置し、東西に延びる舌状丘陵から南東方向に開いた谷の入口に所在する。城域の南側には堀切門が所在し、その西側には狹陥な谷部が所在し、南側土壠線と西側土壠線の尾根状地形が切れる場所に池ノ尾門跡が所在する。この谷部は、鞠智城跡の中で最も低い位置にあり、標高は約90mである。谷部の南西側には南側土壠線の尾根の斜面裾に沿って幅1mほどの小河川「塩井川」が流れ、谷部の北側には水路が流れている。北側の水路は谷の最狭部で塩井川と合流し、その後塩井川は西流し、池ノ尾門跡から約600m先で上内田川水系の初田川に注ぐ。塩井川が初田川に合流する地点には「大門」という地名が残っており、鞠智城に関連する地名であると考えられている。塩井川に沿って現在、市道下本分・堀切線が通っており、池ノ尾門跡が所在する谷の北側斜面裾を通り、鞠智城内へと至る。大門から池ノ尾門跡までは狹陥な谷地形が続くが、池ノ尾門跡を通り城内に入ると、米原台地と南側土壠線の尾根に囲まれた盆地状地形が広がる。

第2節 歴史的環境（図1）

鞠智城跡が所在する地域には数多くの遺跡が残されている。ここでは、鞠智城跡と関わりの深い遺跡を中心に概観する。

鞠智城の2km北の池永には、5世紀代の網掛突起を持つ石蓋土坑墓や小型の結土櫛を主体部に持つ灰塚古墳があり、木野川対岸の下永野の今山には箱式石棺や家形石棺が出土したと伝わっている。

鞠智城の西側3kmの上内田川右岸の台地の縁辺部の山鹿市津貸には、津袋古墳群がある。前期末から中期にかけての大形円墳が分布する。車輪石を副葬品とする割竹形石棺と長持形石棺を主体部とする径32mの円墳である津袋大塚古墳を最古として3つの尾根に分かれて分布する。大塚古墳と同尾根には、一辺約25mでV字形の周溝を持つ方墳の茶臼塚古墳があり、周溝から出土した土師器から4世紀末から5世紀初めの年代が想定される。

また、舟形石棺を主体部とする径28mと推定される頂塚古墳や平原塚古墳がある。平原塚古墳は、津袋古墳群中の北側グループに属し、長さ244cm、幅107cmの枕状の埴みを2つ持ち（北肥後II型）、網掛突起を2個長辺に持つ大形の舟形石棺を主体部とする。津袋古墳群北側グループには、堅穴系横口式石室と推定される朱塚古墳があり、同様な石室が玉名市城ヶ辻古墳群等で分布し、佐賀・福岡等有明海沿岸や玄界灘周辺にも分布することから、北部九州との交流に関わった集団の長を葬った古墳である可能性も考えられる。

後期になると鞠智城の周辺には、多数の古墳が分布する。鞠智城跡の北西に2km程の灰塚古墳と同じ丘陵には横穴式石室を主体部とする尾追古墳やその周辺にも3基の錢龟塚古墳群（主体部は横穴式石室か？）や巨石の天井石を持つ横穴式石室の鬼の竈古墳や頭合古墳がある。

さらに西側の下内田川流域には、菊鹿中学校校庭に石材が残存しているのみであるが、巨石を用いた横穴式石室の徳塚古墳があったと伝えられている。

また、鞠智城跡から2.5km北の木野川右岸下永野に陣の内古墳、陣の竈古墳等の巨石を用いた横穴式石室が分布する。

木野川と下内田川に挟まれた太田川流域には、主体部は不明だが、儀兵山古墳、限崎古墳が分布し、さらに鞠智城の北東側には、小形の石材を用いた单室の横穴式石室を主体部とする黄金塚古墳がある。調査で細かい版築状の盛土が観察されている。

横穴群も木野川左岸の竈口に竈口横穴群（スズメ追横穴群）、木野川と下内田川に挟まれた太田川流域の丘陵南斜面には、日渡横穴群や木野城の岸壁にも追横穴群が分布している。

黒蛭には阿高横穴群、上内田の中原入口にも坂横穴群がある。

南側には270基以上分布する瀬戸口横穴群や西側の御宇田台地の壁には、馬具などが出土する湯の口横穴群がある。瀬戸口横穴群には、8世紀代にも追葬がなされていることが判明している。

これらは、木野川や上内田川が造る段丘上や扇状地に勢力を持つ人々によって古墳が築造されていると推定でき、鞠智城の造営に携わった集団の祖先の墓とも考えられる。

鞠智城の南側にも古墳時代中期の古墳が分布する。南側約2kmの迫間川右岸に山崎古墳の舟形石棺が、約4km南の菊池川と迫間川に挟まれた位置に十連寺の舟形石棺が分布する。

鞠智城の南側約1.5kmには、径約14mの円墳の袈裟尾高塚古墳がある。副室を持つ横穴式石室を主体部とする装飾古墳で、石星形と呼ばれる開放された造り付けの棺の奥壁に線刻で釦（ゆぎ；矢筒のこと）を2つと三角文を配した装飾がある。また玄門や側壁に赤・白色の顔料による彩色が残存する部分がある。さらに、石室を構成する石材（櫛石（まぐさいし））の中に石製表飾が組み込まれていた。

堀切門を場外へ出た堀切集落を中心に南側には、ヒュウ谷横穴群、堀切横穴群、大井桶・大井桶谷横穴群等の小規模な横穴群が点在する。

また、菊池川左岸の鞠智城から約5km南側には、石人が出土している全長約65mの前方後円墳で木棺子フタツカサン古墳や木棺子高塚古墳が分布している。

鞠智城跡周辺の古代の遺跡としては、竹ノ上原遺跡、十連寺跡、西寺遺跡（菊池市）御宇田遺跡群（山鹿市）、うてな（台）遺跡、上鶴頭遺跡などがある（第1図）。

竹ノ上原遺跡は、鞠智城に隣接する袈裟尾に所在する。奈良時代から平安時代を中心とする集落である。堅穴建物のほか、掘立柱建物も確認され、7世紀後半～末の土器が出土することから、当該期の集落跡と考えられる。鞠智城の築造に関わる集落である可能性が考えられる。製塙土器の破片が出土している。

十連寺跡は、鞠智城跡から真南に約2.5km離れた台（うてな）台地の南側斜面に位置する。これまでの踏査や

昭和40年（1965年）に実施された発掘調査によって、奈良時代中期の鴻臚館式瓦の特徴をもつ軒丸瓦2種、軒平瓦2種が確認されており、菊池郡家に付属する菊池郡寺と考えられている。また、伽藍配置は、古代肥後国のはかの郡寺と同様に法起寺式と想定される。

西寺遺跡は、鞠智城跡から真南に約4km離れた菊池川右岸の菊池平野部に位置する。遺跡が所在する西寺地区の北側と西側には、幅5～6m、高さ1.5mの土壘が確認されている。また、南西約300mに位置する南園地区からは8世紀末～9世紀初頭の多量の布目瓦が出土しており、この周辺一帯を菊池郡家に比定する説もある。

赤星石道遺跡は、鞠智城跡から約5km南側に位置する。3間×3間の総柱建物3棟、2×3間の総柱建物、2間×3間以上の東西棟3棟以上、3間×4間以上の南北棟等が検出されている。金属器模倣型杯、墨書き土器（「伝麻呂」）、耳杯形土器、縁輪陶器、越州窯青磁などが出土した。当該地域の開発や経営に関わった有力者が居住していた官衙の機能を持つものと推定される。

御宇田遺跡は、鞠智城跡の西側約4.5kmの御宇田台地上に位置する。昭和60～61年（1985～1986年）にかけて発掘調査が実施され、そのうち妙見第II区の調査では8～9世紀のものと考えられる3間×5間の庇付き建物などの掘立柱建物群が中央広場を挟んで規則的に配列されて検出された。また、石製造方や円面鏡など官衙遺跡から出土することが多いとされる遺物や、越州窯青磁などの当時貴重とされた貿易陶磁器などが出土しており、山鹿郡家であった可能性も指摘されている。

うてな（台）遺跡は、鞠智城跡の南西2.5kmの台（うてな）台地西側端部に位置する。これまで3次にわたる調査が実施されており、七ツ枝II区からは8世紀後半～9世紀前半の規則的な配置をする掘立柱建物群が検出された。また、三彩片や銅椀片、墨書き土器などが出土しており、官衙に関連する遺跡ではないかと考えられている。

上鶴頭遺跡は、鞠智城跡の南西約6.5kmの洪積台地上に位置する。昭和57年に調査が実施され、30m四方の中央広場を囲むように9世紀前半を中心とする16棟の庇付き大型建物跡が検出された。また、「正」「西正」等の文字が書かれた墨書き土器が20数点出土しており、官衙に関連する遺跡ではないかと考えられている。

また、山鹿郡衙推定地の桜町遺跡は、現在山鹿市市街地になっており、詳細は不明であるが、土師器等が出土している。弥生時代から古墳時代で著名な方保田東原遺跡でも古代の遺物が出土しており、拠点集落の一つと考えられる。

このほか、菊池川流域や内田川流域には、大規模な条里の地割りが遺存している。また、台地には延喜式以前の「車路」が南北に走り官道として利用されたと考えられる。そのルートは、大水駅（熊本県玉名郡南閑町）から御宇田遺跡群を通って、台（うてな）台地に至り、そこを斜めに通過しながら西寺遺跡に至るものである。官道は、西寺遺跡からさらに南東へ進み、花房台地で肥後國府方面へと通じるルートと阿蘇を経由して豊前、日向の国府へと通じるルートと分岐する。

鞠智城の南側には、菊池川の本流に流れ込んでいる合志川もあり、古墳時代以来、甲冑や初期の須恵・馬の埋葬や初期馬具等を持ち、ヤマト政権と結びつきが強い集団や渡来系の技術を持った集団が居住したと考えられている。

合志郡衙推定地周辺にも大規模な円墳も存在し、奈良時代・平安時代にも八反原・八反田・八反畠遺跡や篠原遺跡で竪穴建物や掘立柱建物の検出や墨書き土器出土が顕著である。合志川上流の前畠遺跡等でも多数の竪穴建物が検出され、万太郎遺跡や伊坂上の原遺跡等では、道路も検出されていて、鞠智城造営や奈良時代・平安時代を通じて、植木東路という山鹿から南に通じる弥生時代後期以来のルートも含めて交流が行われたと考えられる。

第3章 調査の方法と成果

第1節 深迫門跡におけるこれまでの調査概要（図3から図9）

深迫門跡の調査は、第1・2次調査（1967年度）、第3次調査（1968年度）、第16次調査（1994年度）、第28次調査（2006年度）及び第35・36次調査（2020・2021年度）の7次にわたり実施されている。

第1項 深迫門北側土壘線の調査（図3・4・5・6・7・8）

第16次調査で段々畠の壁面を調査している。段々畠の3段目北側土壘部分で丁寧な版築を検出した。基底部近くに茶褐色土を強く叩きしめた層を検出しており、その状況から土壘の基底部を形成する層と判断された。

また、第16次調査第13図の版築（図5）について観察を行なった。東西方向に切られた断面観察ではあるが、5～10cmの丁寧な版築が確認された。凝灰岩の風化した下層の土のため、強度を増すために版築技法が採用されたと考えられる。土色は、茶白色、灰茶色・橙褐色、黒茶色など多色に及ぶものである。また、樹痕のように見える断面で縦方向のラインは地震によるズレの可能性もあることを示唆している。

4段目は、凝灰岩の岩肌に取り付くように、オリーブ色を基準として全体的にまだら文様が混じる積土が見られる。

以上のように、第16次調査2段目第11・12図（図5）等の土層から版築の傾斜角度や厚みも場所によって異なることから場所ごとの違いが見られた。

第28次調査では、土壘下部及び土壘前面の調査が実施された。

28-4・5トレンチでは、土壘基底部に石列が敷かれ、それをもとに土壘が構築されている状況が確認された。また土壘の前面に整地して石敷があり、面を造っていることが判明し、その石敷きの上に意図的に盛土が施されていると考えられた。

第35・36次調査では、第16次調査の北壁の精査により、版築が約30cmの幅で地山を階段状に削って版築が施されていることが明確になった。また、土壘下層は5cm程の版築がなされている状況であるが、少なくとも5段階に分かれて地業を実施しており、盛土（「積土」（第35・36次調査方向での表現））の幅が一定でないことや前面に版築を足している状況が伺えた。

その工程を復元すれば、階段状に黒色粘質ブロック土まで削って地山を整形する。（第1段階）削った内側の石積を構築する。それを隠す土壘を構築して両側に版築を施す（2段階）。その後、山側は黒褐色粘質土と褐色粘質土の丁寧な5～10cmの版築を行なって（3段階）、さらに山側の上部を谷に向けて傾斜を持った白色砂質土を張って積土する（4段階）。ブロック状の塊土に黄色粘質土を張って（5段階）、その上に黒褐色系の粘質土（6段階）を盛土（積土）している。（第35・36次調査のまとめの記述の順番を整理し直し変更した。）という築造過程を想定した。

第2項 深迫門南側土壘線の調査（図3・4・5・7・8・9）

第16次調査の断面では3段目の断面では約60cmの厚さで、黒色と茶色の粘質土を基調とした層厚約5～10cmの版築による積土が観察された。4段目の断面の南側（山側）では黒色と灰色の丁寧な版築で、北側（通路側）では茶色の粘質土による谷に向かって傾斜する積土が確認されている。

第28次調査の南側の土壘を検出した28-3・8・5トレンチでは、土壘の基底石を確認でき、土壘版築の状況も確認できた。

第36次調査は、それを再確認することに留まつたが、版築の状況を記録できたこと中央のトレンチ凝灰岩の約50cm下に凝灰岩の角礫を検出した。これは登城道もしくは土壘前面の石敷きに伴うものである可能性があり、さらに下に面があることが確認された。

28-6トレンチでは、暗褐色と黄褐色ないし褐色系の粘質土の版築が確認された。内側は埋められた土坑か溝状の埋土が観察された。下層にわずかながら褐色系の土が検出されたことから、白色粘質土系の土壘版築が推定された。

第3項 登城道の調査（図3・5・8・11・15）

第16次調査の2段目の部分で拳大の礫による集石状の遺構を検出した（第16次調査図21）が、これは後世に登城道の路面の石が集められたものと推定された。また、その下部（南東側の下がっている部分）に溝状の痕跡と長軸50cm程度の楕円形の掘り込みが50cm程度の間隔で8基以上検出され「波板状圧痕」と考えられる遺構の存在から第16次発掘調査の報告者により登城道である可能性が指摘された。

また、第16次調査報告書P16第13図上（図5）の3段目の断面（11）から右側（12）にかけての土層断面から、版築の上に堆積した土が壅み部に堆積していると考えられ、土塁が構築された後のものであることがわかる。第12図の4段目（図5）からは、版築が北側に向かって傾斜する堆積層の上を切って壅みが形成されているように見えることから新しい時期に使用された登城道と推察できる。

また、35-3トレンチで石積みを検出した。（標約124.5m）その下層に石積みを検出できていない。さらに28-6トレンチの下層に丸石を検出している。（標高125m）35-3トレンチからその辺りに古い登城道、さらに言えば、門道を想定できる。

第36次調査で28-5トレンチの再調査を実施し、原位置かどうか難しい面もあるが、角礫を上層で検出した。35トレンチ上部で検出した集石状遺構に対応する可能性がある。

また、28-5トレンチの北側土塁前面の石敷きの面と南側土塁の基底石の面に対応する面が2段階目の道路面としてほぼ水平に道路面を想定していたが、深掘りしたトレンチのほぼ50cm下に角礫を検出したことから下層にも古い時期の道路面が存在したことが判明した。

第2節 調査の方法（図3）

35-3トレンチの埋戻していた土嚢袋を除去し、東側の状況を確認するため、第28次調査で埋戻して土砂を掘削した。第28次調査の28-11・12トレンチから28-5トレンチまでを平面的に続ける形のトレンチを設定して、門周辺の北側の土塁構造を解明することを重点とした。（第37次調査区）

その際、段々畑で段になっている斜面には、緑色ネットの土嚢袋等により養生していた部分があったが、35-3トレンチの東側壁一部と北側土塁の柱穴の並びを確認するための掘一部の除去に留めた。

35-3トレンチの東側では、版築や盛土を確認し、28-11トレンチの西壁断面からの見通し断面図の作成を行なった。

35-3トレンチは、下場の幅が30cmしかなく、写真や測量図を作成するのに観察が十分できなかったため、トレンチ下場幅を50cm以上確保できるようにトレンチ上幅を80cm程度に拡張した。

35-3トレンチ東側の土層との対比で断面の見直し、検討を行い、写真測量によりオルソ図面を作成し、実測図を作成した。

28-12トレンチは、埋戻した土を除去し、精査して35-3トレンチ東側の断面見通し図に続くような形でオルソ画像を作成した。図化した。一部、現地で補足実測を行い、図面を完成した。

深追門周辺の南側土塁の調査については、調査期間が十分でなく28-6トレンチの埋戻していた土嚢袋を除去し北側土塁と比較する形での調査を実施した。調査終盤に一部幅20cmで深さ50cmのトレンチを設定して土塁の版築状況を確認した。

測量については、（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、写真による合成でオルソ画像を作成し、それをトレースする形で測量図を作成した。TOPCONのlayout navigatorで座標を確認し、SONYミラーレス一眼カメラα6000を基本的に使用し、近接した場所はiphoneを使用して写真撮影により3D計測図化したものをトレースし、一部を手実測により補正した。

その他記録写真については、フルサイズのデジタルカメラ（NIKOND610）を使用した。

令和4年（2022年）5月末から8月末日までの調査期間という暑い中の発掘作業であったため、寒冷紗を調査区に張って実施した。必要に応じて寒冷紗を外して観察を実施したが、すぐに乾燥して土層観察・遺構検出・写真撮影は、困難を極めた。

調査の進捗状況や内容の確認については、深追門調査検討委員会（文化課の過去の鞠智城跡発掘調査を実施し

た経験を持つ文化課の村崎孝宏・矢野裕介氏、文化課鞠智城跡担当花田社綺氏及び歴史公園鞠智城・温故創生館の学芸職 3名)で調査の進捗状況で重要な時期に調査方針の検討を行いながら、実施した。

また、鞠智城跡保存整備検討委員会や専門調査員の御指導・御教示を得て、35-3トレントチや28-6トレントチに追加のサブトレントチ等を設定して、調査を実施した。

なお、実測図を作成後、土養袋により埋戻し作業を行った。35トレントチ断面・28-5トレントチの北側断面については、斜面の養生を十分にできなかったため、乾燥を防ぐため、シートにより養生を行っている。

第3章 令和4年度(2022年度) 第37次調査の成果(図10~21、写真1・2・17)

第1項 調査の概要

35-3トレントチは、第35~36次調査で確認された版築の基底石に伴う床面や方向、断面の記録や状況を詳しく確認するためにトレントチの幅を30cm程南側に拡張して再観察を実施した。その結果、トレントチの下場の幅が50cm程になり、デジタルカメラでの写真撮影が可能になった。また、さらに、積み石の裏側(山側)部分に25cm程の幅でサブトレントチを入れることも可能になった。

35-3トレントチで検出した褐色系と黄褐色系の土で版築した土壘の内側(谷側)に見られる、白色砂質土と褐色系の土で版築した地業が土坑状のものか内側(谷側)への追加した版築土壘なのかを確かめる作業を実施した。具体的には、35-3トレントチの東側の平面の確認のため、第16次調査、第28次調査で検出した面を再精査するために埋戻した面を再検出した。

その結果、35-3トレントチで柱穴を検出し、第35~36次調査区の門想定地で確認された土坑とも推定された部分は、唐居敷等を抜き取って埋めた版築ではなく、土壘を内側に狭めるための版築であると考えられた。

そこで28-5トレントチから続く柱穴(堰板を支える支柱)の推定ラインと第28次調査の28-11・12トレントチの再調査と調査期間を考慮して調査区を確定した。(ここでは、第37次調査区と表現する。)

第37次調査区を精査した結果、柱穴を5基検出した。当初想定された褐色土と暗褐色粘質土を使って版築した堅緻な土壘の前面だけではなく、その内側に柱穴を検出した。柱穴の配列は規則的ではないが、位置的に当初土壘の内側に門造成のための地業がなされた痕跡と考えられた。

また、調査期間から北側土壘を主に調査する方針を立てたが、南側土壘との比較検討のため、28-6トレントチも再検出し、一部時間の許す限り、サブトレントチを設定して土層の確認を行った。

その結果、階段状に形成した後版築された状況と3段階以上の土壘の壁の形成のための地業を確認した。

ただ、門周辺の北側土壘と南側土壘の土層の対応関係は、35-3と28-6との対応関係を示す平面や断面部分を調査できなかつたため、推測の域をでていない。

第2項 37トレントチの調査(図10・11・12・15・16・17・18・19、写真3・5・9・10・11・15)

35-3トレントチの東側に拡張したトレントチである。第16次調査で検出された面をベースに第28次調査で再調査し、一部に28-11・28-12トレントチを含む。

検出面は、土壘が削平されていて土質は一様でない。南側は、20から25cmの礫を3点検出している。以前の調査でも検出されているようで、上層の集石遺構から30cm程下がっており、阿蘇溶結凝灰岩の礫を南西部分に検出したことから考えて、南西隅の部分は、登城道の1つの面を構成していた可能性がある。

検出した遺構

柱穴は、5基検出した。掘方の径は約70cm程度で柱径は20cmから25cm程度深さは80cm以上である。P4は、柱の掘方の径約50cm、深さは約80cmで柱の径は約20cm程度である。他の柱穴の詳細は、トレントチにかかっているところは、その項に譲ることとしたい。

また、ピット状に検出された部分があり、半裁してピットかどうか検討したが、明確な掘り込みが確認できなかつた。平面図では、落ち込みとして記録している。

小結

上層が削平されている関係もあるが、柱穴の配列を決定するのが困難である。門の構造の柱の可能性もあろう

が、唐居敷の状況や土壘や版築の状況や柱間の間隔が一定しないこと等から考えて、土壘築造時の堰板の支柱等の可能性がある。また、門の土壘が広がっている箇所から門道に近くなっていたため柱列が一部折れ曲がっている可能性もあることが柱間距離の一定しない原因とも考えられる。

第3項 35-3トレーニングの調査(図10・11・12・13・14、写真4・6・7・8・16)

門周辺の土壘構造を明確にするために第16次調査で掘削した西側壁面を再調査した第35次調査の際に、門推定地付近の壁面の下層構造を調べるために壁面から80cm離して設定した長さ4mのトレーニングである。第35・36次では上部のトレーニング幅50cm幅(下部は約30cm幅)であったが、記録を取るのが困難であったため、幅を80cmに広げ、下層の幅を50cmまで広げた。

検出した遺構

1 石積み(図11・12・13・14)

第35次調査で3段の石積みを検出したが、幅30cm程の検出であったために詳細は不明であったが、幅を50cm程に広げたために少し平面的な広がりが確認できた。長い石で長さ70cm厚み25cm程度が確認できた。3段の部分はあったが、全体には2段を意識している可能性がある。また、3段の石積みの裏側(北側・山側)に丸石を確認でき、裏込め石等の役割を果たすとも考えられる石積みが石垣状に積んでいることが確認できた。

2 柱穴(P-6)(図11・12・13)

35-3トレーニングの南側にピットを確認した。平面的に検出したもので径60cm程度、深さは、1.1m以上である。柱穴は20cm以上と推定できた。掘方の規模は大きないので、版築工法における支柱の痕跡の可能性がある。また、平面的な状況から北側土壘からの版築工法における支柱の痕跡の並びから門道に向けて屈曲していると考えられる。

登城道の幅を表す起点となる可能性がある。

3 門周辺の北側土壘

土層断面(図13・14)から

第36次発掘調査での35-3トレーニングの断面が3段の積み石の上部土層断面が台形状に盛り上がって観察できたため、3段の積み石の部分を台形状(土壘状)に土砂を積んで山側・谷側に版築していると解釈した。

今回実施した28-11トレーニングの上層から28-11トレーニング内の断面の観察によると、褐色系粘質土と黄色粘質土のしまった版築土が直線的に綺麗に積まれておらず、3段の積み石の上にまず台形状に版築ないし盛土してから両側に版築ないし盛土をするという地業をしているという解釈が難しい断面であった。そこで、版築下層で検出された石積みがどのような役割を果たしているかを再考する必要が生じた。

今回の土層の観察にあたって、積み石の上に台形状に版築が堆積していることは確実なものとして、再度観察し分層を実施した。

土層の分層にあたっては、35-3トレーニングの西側壁の分層・土色表記をまず優先的に実施し、それに併せて東側の分層及び28-11トレーニングの上層およびトレーニング内の分層を行なう形で実施した。

35-3トレーニングで観察された版築および盛土の層を大きく4つのグループに分けて記述したい。

北側のI層群には、平面的にほぼトレーニングに直交する形で検出された樹根もしくは断層に伴う亀裂が見受けられた。亀裂が70cmほどの長さで階段状にずれている状況が観察できた。

断層ならば完全に同一土層であれば対応するズレを図示することができるはずであったが、十分対応させることができなかつた。ただ、明らかに対応しないという層ではなく、3~5cm程度のズレで断層の亀裂が生じたといえるような状況である。記録では、亀裂の左右での土層の土色(I A(北側)・I B(南側))と独立した番号を付与した。

I群の土層は、黄褐色から褐色の粘質土と黒褐色系の土を交互に版築されていると考えられるもので、非常に堅緻なものである。土壘の版築のための地業である。

I B層群は35層の部分でII層との層界が屈曲している。この層から版築の南側への傾斜が強くなっている。また、55層付近でも内側に層があり込んでいる状況である。

II群の土層群は、検出された3段の石積みの上に石積みの背後（北側）40cm以上の幅、石積みの南側1m以上の幅で積まれた版築土である。白色の砂質土が混じった層と暗褐色の粘質土が互層に積まれたものである。I群の層に比べて締まりは弱い。

石積みの北側は、140から148層で埋められており、石積みの南側は、ある程度積み土で埋められた後155から167層の溝状の土で埋まっている。排水を行っていた可能性がある。

図13にあるように要所に黄褐色の砂質系の土を混ぜながら、7段階以上に版築されている様子が伺える。積み石の部分の幅50cm強を比較的水平に積みながら、その南側はやや傾斜を持った版築になっている。

上底が約1.2mの幅で水平で南側に向かって傾斜している状況がり上がった状況で分層できる。

IV群の土層は、前述したP-6（柱穴）の断面である。丸石の出土面を養生したので、深さは確認できていないが、石柱もしくは、門柱の柱穴と推定できる。

III群の土層群は、いわゆる黒色の「ニガブロック」を含め盛土である。

この辺りの基本土層で言えば、凝灰岩の風化したいわゆる八女粘土（黄色ローム層）のさらに上の層に起因すると推定できる。

35トレンチ上層の段階状に削り出したいわゆる地山層（f・g）である。4-1層から4層までは5cm程度の細かい版築がなされている。4-5・6層、7から12層までの大きく3段階に分かれていると考えられる。ブロック状の締まった土でII群の土層群の谷の内側に盛土されている。

東側の崩落した断面もブロック状の土が崩落したと考えられる。

小結 I群の土層は、黄褐色から褐色の粘質土と黒褐色から暗褐色粘質土の互層版築土をベースにしており、土壌としての強度も高い。北側の28-5トレンチで検出した土壌壁の強度に類似する。

亀裂については、上記にも記述したように規則的な層のズレを記録していないが、平面的な亀裂のような痕跡も第35次調査から検出できており、『日本書紀』や『豐後國風土記』にも記録されているような天武7年（679年）の「筑紫大地震」等の影響も考えられる。

II群の土層は、図面では分層線を太く示しているが、(A) 101から105まで、(B) 106から115まで（114除く）、(C) 116から129・149から150まで、(D) 129'から136・156から158・170、(E) 153・154・160、(F) 155・159・160から167まで、(G) 168から169・170～177、(H) 140から148までの地業に大きく分かれると考えられる。

(A)から(H)はやや砂質系の淡い黄色砂質土から白色砂質土をベースに黒褐色のシルト層を交えた版築土である。締まりが弱く、東側の壁がおそらく、黒色のブロック土（III群の土層群）の崩落のため空洞が開いたようにもI群の版築より強度が弱い。

III群の土層群は、ブロック状の締まった土である。II群の土層群の谷の内側に盛土されているのは、II群の土層群を補強する役割を持つと考えられる。柱穴（P-6）も検出されていることから堰板を伴う「保護盛土」や「外皮盛土」と言われるものに該当する可能性がある。

また、I群とII群の版築の前後関係については、簡単に断定はできない。I群の土層のうねりとII群のうねりや版築の大きな単位にも類似しており、連動する可能性がある。そうするとほぼ同じ頃に版築されたものと考えられる。IIの104層とIの36層、IIの113層とIの38層、IIの117層とIの41層、IIの129層とIの50層、Iの137層と54層などの対応が見られる。このことは、双方に意識された版築でI群とII群が堆積している時期に營力がかかった可能性を示唆している。

28-11トレンチの版築断面が亀裂部分から谷側（内側）に顕著に傾いていることから、版築はある程度水平に地業するという前提に立てば、35-3トレンチの $\alpha - \alpha'$ のラインもう少し直立していたと考えられる。

3段の石積みの用途を断定するのは、困難である。ただ、北側土壌や北側土壌の基底部に石列が並んでいることから考えると、II群の土層の下のほぼ中央に隠されている状況であることから、現状の土壌の基底部に意図的に基準として置かれた状況ではない。

この土壌が形成される時期以前に基底石や石垣として構築された痕跡で土壌の改変や崩壊のために土壌幅を調

整するために埋められたものと推定したい。

第4項 28-11トレンチの調査（図14・15、写真10・11・15）

第28次調査で設定していた幅40cm長さ1mの小トレンチ。段々畑2段目に設定したトレンチで上層の集積礫（上層の登城道の可能性がある面）に隣接して、土壌構造を見るために設定したと考えられるトレンチである。

検出した遺構

1 柱穴（図15・16）

(1) P-1

28-11トレンチの南側断面にP-1を検出した。柱掘方の径は約70cmと推定できる。柱穴は径20から25cmと推定できる。深さは1m以上を測る。

断面が28-11トレンチの上層は、見通し断面のため、検出面は明確でないが8-5層下から検出している。それ以上の上の層から掘削されていると考えられる。

(2) P-2

28-11トレンチの南側断面にP-1を検出した。柱掘方の径は約70cmと推定できる。柱穴は径20から25cmと推定できる。深さは70cm以上を測る。

断面が28-11トレンチの上層は、見通し断面のため、検出面は明確でないが8-5層から検出している。それ以上の上の層から掘削されていると考えられる。

2 門周辺の北側土壌

土層（図15・16）

図14は、28-11の西側断面及び上層及び左右には、段々畑により旧地形が削られ、版築断面が見られるため、西側断面からの見通し断面を作成した。35-3トレンチよりラインは15度程度東側に振れるが、35-3トレンチの東側断面の裏側に当たる断面になる。

35-3トレンチと対比するとI群の土層群は、北側の断面の上部は内側に傾斜するが、127.2m付近では、傾斜が緩やかになっている状況である。亀裂と考えられる部分は、高さ50cm程で段状になり、亀裂部分より西側の版築は、35-3トレンチより傾斜を持つ。 $\alpha 2-a'2'$ の線と直交に近い状況である。

II群の層群は、谷側に頗るに内傾している。11-3-14層から下は、5cm程の層を盛土して版築している。これは、35-3トレンチの(D)群の土層群に対応するものと上層は10cm程の盛土を積んでいるように観察できる。

35-3のトレンチのII群の土層群の(A)・(B)・(C)に対応するものと考えられる。

35-3トレンチのIII群の土層に相当する土層群が見当たらないが、(B)の下層の比較的細かい土層があり強度は比較的強い部分であった可能性がある。

IV群相当する土層群はP-1の埋土である。

また、(A) 11-5-1から11-5-3の層群、(B) 11-6-1から11-6-8、(C) 11-7-1から11-7-5まで)は、新しい登城道のために埋められたものと考えられ、28-6トレンチの埋められた土坑状の地業に対応する地業であると推定される。

また、P-1とP-2の間の層(4-1~4)は、盛土であるが分層が難しく版築とは言えない。明らかな版築のII群の土層群との関係が問題になる。

小結 28-11トレンチでは、北側・南側2箇所で柱穴を検出した。いずれも28-5トレンチの北側土壌壁にある柱穴のような位置関係はない。今回は土壌部分その土壌部分については、今回のトレンチの北側から1m以上離れており、明確な版築構造を持つ土壌の構築のための堰板を支える柱ではない。

ただしP1は、3-15から3-16のやや締まりが弱い土層の版築の前面に位置する。またP-2は、5-1から5-3の前面に位置する柱穴とも見られ、北側土壌の幅を狭めるとの版築や盛土のための堰板を支える柱の可能性がある。

地山がどこなのかが不明であり、版築土の下層の確認をして地山を確認することで4-1から4層の土層の意味

や地業の規模が判明するため、28-11トレンチの北側もしくは南側の掘削をする必要がある。

第5項 28-12トレンチの調査（図12・17・18、写真10・14）

第28次調査で設定していた幅50cm長さ2.5mの小トレンチ。段々畑2段目に設定したトレンチで28-5トレンチと28-11トレンチの間の位置にある。土壁北側前面の保護盛土や登城道（作業道）や登城道の確認のために設定されたトレンチと考えられる。

検出した造構

1 柱穴（図18・19）

（1）P-3

28-12トレンチの北側に東断面及び南断面の両方にまたがり、柱穴が検出された。掘方の径約70cmと推定できる。柱穴の径は30cm以上と推定できるが、規模から見て抜き取り穴の可能性もある。深さは、80cm以上を測る。

28-5トレンチのP-1のように版築をされた断面のすぐ前面の柱穴ではない。削平された保護盛土の上から検出されている。

（2）P-5

28-11トレンチの北端から1mのトレンチ断面で検出した。柱の掘方の径約60cmと推定できる。柱穴の径は20cm程度と推定できる。深さは60cm以上を測る。

28-5トレンチのP-1のように版築をされた断面のすぐ前面の柱穴ではない。削平された保護盛土の上から検出されている。

2 門周辺の北側土壁

土層（図18・19）

28-11のI群の層群や28-5トレンチの壁で検出されたようなガチガチの版築土壁の断面は検出していない。

28-11トレンチの上層の11-3-14の層より下層の5cm程度の厚さで版築されている土層も観察されなかった。

P3の谷側（南側）にA-1から6に10cm以上ではあるが、水平に近い盛土（積土）が見られる。白色の凝灰岩の風化したブロックを含む層である。さらに谷側にも盛土（積土）が見られる。断面で検出したC群も土層群が見られる。C1から6までは、15cmから20cmの厚い盛土であり、南側に傾斜して堆積しているが、標高124.7m以下では、層の厚みはあるものの比較的水平に盛土がなされていることが観察できた。

C6層には地山上層の暗褐色のブロック土を含む。この層は35-3トレンチのIII群の土層にも類似する。

小結

37トレンチ内に位置するのは28-11トレンチ及び28-12トレンチであり、土層の比較が必要である。類似点は、柱穴がそれぞれ2つ検出していることと柱間距離がほぼ1mであることである。

役割はP-5がB層の前面にあり、A層を版築するための堰板の可能性がある。

P-3は削平されて不明であるが、28-5のトレンチで検出された土壁より新しい段階の版築や保護（外皮）盛土のための堰板を支える柱の可能性がある。

ただ谷堆積であり、トレンチの規模や幅が限られているため、土層の観察が難しい面があった。また、深さが130cm程度しか掘削できなかったことと、28-5トレンチで地山まで掘削しておらず、28-5トレンチ南側との比較も高低差もあり、メルクマールの層が難しい。28-11トレンチと28-5トレンチとの対応関係を検討するためには、登城道の床面や地山の検出等が必要と考えられる。

第6項 28-6トレンチの調査（図10・図21、写真12・13）

第28次調査で設定したトレンチである。トレンチの平面位置のみしか記録されていなかつたため、位置的に門周辺の門南側の土壁の範囲や版築土壁構造また、門構造の把握ができる可能性があると推定し、第36次調査で再調査を実施した。その結果、地山を水平に切り出して版築を行なっていたこと。下層には、白色シルトを主体とする版築があり、その上に暗褐色系と褐色系の土を使用して5から10cmの丁寧で締まりのある版築が施され

ていることが判明した。東側や西側の断面を詳しく分析すると平面プランは難しいが、トレーナー北側の谷側には、4回の掘り込みがあるような状況であった。版築ではないが、意図的に埋められており、しかも途中で硬化した面を持つような状況（8層・9-1層）であった。意図的に埋めているのは、門の地業に関わるものか、または、排水のための掘り込み等のための掘り込みと推定できる。

今回の第37次調査では、28-6トレーナー周辺の平面を東側に広げて、その構造を確認する予定であったが、先に記述したように、門周辺の北側土壌構造の確認に時間を割いてしまったので、今回は十分な調査時間を取りなかつた。しかしながら、北側土壌や門周辺北側の地業とを比較するため、埋戻していたトレーナーを再検出した。さらに、土壌の下層の版築を確認するために下層に幅30cmのトレーナーを設定した（鞠智城跡整備検討委員会亀田修一先生の指導による）。南側土壌が凝灰岩の風化した土壤の地山又は版築（ないし盛土）と考えられる土層を階段状に成形された後に版築されていることを確認した。

小結

28-6トレーナーの断面上では、約1.2mの幅で70cmほどの高さの階段状に成形された上で版築が形成されている。しかしながら、トレーナーの壁が地形に直交ではなく、大きく見て30度程度西に振っている可能性が高いため、版築の高さや地形の振れから考えて60~70cmの幅の段構造に地面を削った後、白色シルトに黄褐色粘質土・褐色シルトを混ぜながら版築していたと想定される。

また、当初深追迫検討委員会でも地山と推定していた土層（J'）に調査者が図面の注記の際に少し乱れがある箇所が存在し、L層には、褐色のブロックが混じり、N層は土色がやや褐色を帯び、P層は、粘質を帯びる層のため、地山であるかどうか再検討する必要があると調査担当者は図面校正時に考えた。調査期間が限られていてダメ押しの掘削ができず、課題が残った。地山の土色の変化の可能性も含めて、今後の課題としてあえてJ'からP層の分層をオルソ画像も併せて分層を試みて図面に反映している。今回検出された版築より、さらに古い盛土が形成され、その後、階段状に削り、版築を補強していた可能性も考えられる。

北側土壌の下層で確認された3段の石積みを探してトレーナーを深く掘削したが、KからP層のさらに南側に石積みが検出される可能性も否定できないことを付け加えたい。今後の課題である。

また、下層の版築の前面に縦方向の粘土（α）が検出されている。掘り方が明確でないが、杭状のものと考えられる。さらに山側にも粘土ではないが類似した土層（β）があり、さらに地山に類似した層の下層に粘質土が検出されている。版築土の軸となる層がシルトから砂質土であり、柱を埋め込むではなく杭状の支柱を打ち込んでいる可能性がある。2時期以上の土壌の壁が想定される。

第4章 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男

第1節 はじめに

鞠智城跡の発掘調査に伴い検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

第2節 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-48292	試料No. 1 調査区：35-3トレンチ 層位：下層（丸石50cm下）ル層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸、アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48293	試料No. 2 調査区：28-12トレンチ 層位：9層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸、アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L） 処理参考：土混じり
PLD-48294	試料No. 3 調査区：P-4 層位：肩部	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸、アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

第3節 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行るために記載した。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95.45%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。

表2 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-48292 試料No. 1	-24.85 \pm 0.18	1290 \pm 20	1290 \pm 20	675-704 cal AD (32.63%) 740-753 cal AD (15.73%) 757-773 cal AD (19.91%)	667-708 cal AD (41.82%) 713-717 cal AD (1.58%) 721-774 cal AD (52.04%)
PLD-48293 試料No. 2	-27.89 \pm 0.21	1361 \pm 20	1360 \pm 20	651-666 cal AD (68.27%)	643-679 cal AD (93.13%) 751-758 cal AD (2.32%)
PLD-48294 試料No. 3	-24.57 \pm 0.20	1288 \pm 20	1290 \pm 20	676-705 cal AD (33.24%) 739-752 cal AD (15.74%) 757-773 cal AD (19.28%)	668-709 cal AD (40.69%) 712-774 cal AD (54.76%)

第4節 考察

測定結果（以下の較正年代は 2σ の値）は、以下のとおりである（図1）。

35-3トレンチの下層（丸石50cm下）ル層採取の試料No.1 (PLD-48292) は、 ^{14}C 年代が 1290 ± 20 BP、較正年代が $667-708$ cal AD (41.82%)、713-717 cal AD (1.58%)、721-774 cal AD (52.04%)で、7世紀後半～8世紀後半の曆年代を示した。28-12トレンチの9層採取の試料No.2 (PLD-48293) は、 ^{14}C 年代が 1360 ± 20 BP、較正年代が $643-679$ cal AD (93.13%) および $751-758$ cal AD (2.32%) で、7世紀中頃～8世紀中頃の曆年代を示した。P-4の肩部採取の試料No.3 (PLD-48294) は、 ^{14}C 年代が 1290 ± 20 BP、較正年代が $668-709$ cal AD (40.69%) および $712-774$ cal AD (54.76%) で、7世紀後半～8世紀後半の曆年代を示した。試料No.1 (PLD-48292) と試料No.3 (PLD-48294) は、ほぼ同じ年代値を示す。

古墳時代の年代観については岸本（2011）、古墳時代以降の時期区分に関しては児玉編（2018）に従うと、試料No.1 (PLD-48292)、試料No.2 (PLD-48293)、試料No.3 (PLD-48294) は、すべて飛鳥時代～奈良時代に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、すべて最終形成年輪を確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

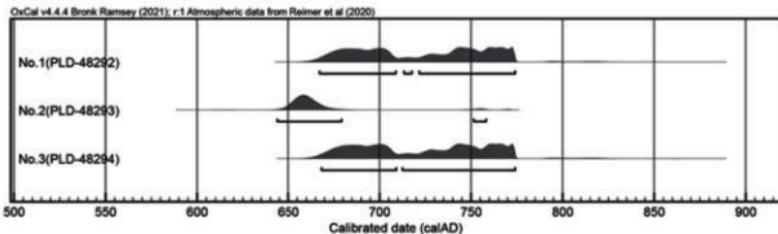


図1 マルチプロット図

（引用・参考文献）

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

岸本直文 (2011) 古墳編年と時期区分. 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編「古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組み」: 34-44. 同成社.

児玉幸多編 (2018) 標準日本史年表. 66p, 吉川弘文館

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capone, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第5章 まとめ

第1節 門周辺の土壙構築の方法と変遷（図22）

第1項 断面から見た門周辺の構造について

深迫門の南側土壙・北側土壙では、前述のように基底石を基準に直立する土壙を築いており、土壙前面に柱穴が検出され、堰板を支える支柱と推定されている。また土壙前面には石敷き、その上には、「外皮盛土」や「保護盛土」がなされている状況が確認されている。

その中で、第36次調査で35-3トレンチの標高125.2m付近で3段の石積みを検出した。

その構造は、土壙部分の築造方法と異なり、門道及び門の造成に伴う地業と想定された。

そのため、35-3トレンチを広げて断面を再確認するとともにさらに下層にサブトレンチを入れて門道の床面の状況などを確認した。35-3トレンチの東側斜面の精査と35-3トレンチの断面との比較検討も実施した。35-3トレンチから28-12トレンチまでの平面的な精査と断面に現れた土層の比較検討も実施し、門周辺の土壙の築造方法を詳細に検討した。

その結果、石積みを隠すように褐色と暗褐色の粘質土の堅緻な土壙の前面（谷側）に検出された凝灰岩の風化した白色系のシルト層のやや締まりが弱い版築土（図12のⅡ群の層群）は、谷を狭めるための地業と考えて良い状況であった。

第35次調査では当初土坑状にも平面的には見えて門磯石を埋めるための地業とも推定したが、東側の28-11トレンチ上層の見通し断面図（図15）と35-3トレンチ（図13）を比較検討してみると門付近の門道の幅を狭めるための地業と考えられる。

もちろん、段々畝の変形で地形が削平されており断定はできないが、現存する唐居敷の大きさから見てもⅡ群の土層の上層（図13のⅡ群A・B層等）部分について唐居敷を据えるための整地や唐居敷の抜き取った痕跡と考えるのは難しいと考えられる。

Ⅱ群の土層の下部中央に検出された3段の石列は、版築の基準になったものと考えられる。

ただ、深迫門の他の箇所で検出された北側土壙や南側土壙の基底石は、版築に半分かかるように配置された基準の基底石であるのに対し、明らかに様相が異なる。そこで第36次調査時に検出した3段の石は60cm以上の石が使用されていることから門道の壁面を構成する等門道周辺の地業に関わるものと考えられる。

もし、当初から3段の石積みが配置されたのであれば、石積みの背後の土は、裏込め的な役割であり、 $\alpha - \alpha'$ の傾斜が地震等の作用やまた他の要因で石積みの上部が崩れ、門道周辺部分を整地し直す際に石積みが埋められた可能性もある。今回の調査では南側土壙部分にある28-6トレンチで3段の石積みに対応する石積み等の地業は確認できなかった。今回28-6トレンチで設定したサブトレンチは時間の都合上小規模なものであった。北側土壙の石積みが隠れている可能性もあると考えられる。

ただ、北側・南側との土壙の対応関係は、35-3と28-6との対応関係を示す平面や断面を調査できなかつたため、推測の域をでていない。

それでも現在の調査成果から可能性を推定するために35-3・28-6・35トレンチ上層の合成模式図面（図21）を作成した。（それぞれ、トレンチの断面の基準が違うが、35-3トレンチと35-3上層については、断層？かもしれない亀裂部分を合わせて、28-6トレンチと35トレンチ上層については、3段の石列と28-6トレンチの下場のラインに合わせて配置した。上層部分と下層部分も結合するためにレベルも約25cm調整している）

模式図から28-6トレンチで検出された門道の床面の高さと柱穴の位置や28-6トレンチの杭と推定される α ・ β の土層等から推定して第5面まで想定した。ただし、28-6トレンチは、土坑状の遺構の切り合いを断面で想定したもので、第1面は、集石構造が出土した面で、最上層の面と認めるものと道路面として綺麗に検出されず部分的なものであるため、道路面として認めない立場もある。（第16次調査報告書では、道路面として認めていたが、総合報告書では、触れておらず認めない立場である。）第35・36次調査報告書でも記述したが、石列を綺麗に配置していることから、道路面の可能性があると考えている。第2面は、凝灰岩の礫が出土している面である時期の道路面の可能性がある。

第3面は、28-6トレンチで04-SXの下層として報告している面である。標高約125mで幅約3.5mと推定できる。第4面は、3段の石積みに対応するもので、3段の石が原位置を保って露出していたと考えた場合である。その場合、基底面標高124.5mで、幅約4.6mと推定できる。

第5面は、北側土塁の褐色と暗褐色系の土を使用して版築工法で造成した堅密な土塁を壁として南側をaの土層を壁と考えたもので最大幅である。南側の掘削されていない部分に石積みが隠れているかもしれないという仮定である。

実際には、第4面・5面の想定幅の組み合わせだけ、また、床面は整地面があると考えられるために他の組み合わせがあると考えられる。

これらを明確するためには、明確な床面を掘むこと。また、35-3トレンチと28-6トレンチの土層がつながる断面を検討することである。方法としては、集石構造を壊して下層を掘削してつなげること。または、35-3トレンチの東側は段々畑で削平されているため背後の断面を検討し、28-6トレンチの北側の04-SX・05-SXの平面や断面の鍵層が見出せれば、蓋然性が高まると考えられる。

第2項 37トレンチの平面から見た門周辺の築造技術

37トレンチの大部分は段々畑の造成により、削平されており、旧地形は不明である。

しかしながら、今回精査したことにより、旧トレンチ（28-11・12、35-3トレンチ）を調査することによって6基の柱穴を検出できたが、整然とした柱配列ではなかった。35-3トレンチや28-11トレンチ、28-12トレンチの断面と柱穴の土層との関係から、門の床面が何段階かに変遷する可能性が高いため、土塁の壁を構築するのに少なくとも2段階、古い褐色と暗褐色系の土を使用して版築工法で造成した堅密な土塁のための柱穴は土塁際に想定され、今回は、土塁保護の観点と時間の都合から検出することができないので、3段階は、土塁の壁を構築するために版築工法における支柱の痕跡が認められると考えられる。

整然としていないため、柱間距離での分類も難しく、組み合わせが不明であるが、土層の検討を組み合わせ、柱間距離の不揃いを門道と土塁部分の形状等の調整と考えるならば、今回の調査で平面的にも土塁の変遷が追える可能性がある。

28-5トレンチの褐色系の土塁の前面は、外皮盛土（保護盛土）と想定され、版築工法ではないため、必ずしも堰板が必要ではない盛土工法と考えられる。そのことから考えると、今回検出した柱穴は第28次調査で想定された土塁が屈曲して門道を形成する箇所に想定される部分であり、柱穴は、版築工法における支柱の痕跡であり、保護盛土（外皮盛土）ではなく当初の土塁からさらに2段階に内側へと造成（版築）された土塁のラインと考え、平面図に点線で図示した。（図11）

あくまで推定であり、版築工法に伴う足場等に伴う柱穴も存在する可能性もある。柱間距離が不規則なのは、「ハ」の字に直線的に伸びる土塁から門道にかかり屈曲部で長さを調整しているためや何回かの改修を行なっていることが要因と解釈する前提が必要である。

本来は、褐色系と暗褐色の土を使用して版築工法で造成した堅密な土塁の柱列を検出できれば3段階の構造の版築の堰板の構造が明確にできると考える。しかしながら、ハの字に開いた土塁線が直線的な門道を形成している様子を検証するには、平面的な版築工法における支柱の痕跡（堰板のための柱穴）の配列と門道の床面や門造成のための版築構造のわかる断面の分析が必要である。35-3トレンチ、28-11トレンチ・28-12トレンチの延長や掘削深度を深める等に相当する調査が必要と考えられる。

また、北側土塁と同様に南側土塁についても版築工法における支柱の痕跡を検出できる可能性がある。褐色と暗褐色系の土を使用して版築工法で造成した堅密な土塁の前面の整地の痕跡を平面的に検出するとともに南側土塁の他の柱穴を検出することが門周辺の構造を分析する手がかりとなると考えられる。

第3項 土塁の規模と上部の版築について

現在最古段階の門周辺の底面の高さが、標高124.5mよりやや低く、現在検出されている基底面が地山ではないと考えられるため、それが整地面としても50cm程は低い可能性が高い。35トレンチの上層で積土が確認できる

高さは標高約129.5mである。その比高差約5m以上であることで、高さ5m以上の土壘が確認できたことになる。北側土壘の下部の唐居敷の上部に版築が観察されていることと段々畝により35トレンチ上部が削平されていることから考えて、35トレンチの土壘上部は、1m以上は削平されていると考えられる。そのことから、6m程度の版築ないし盛土（積み土）があった可能性が高い。

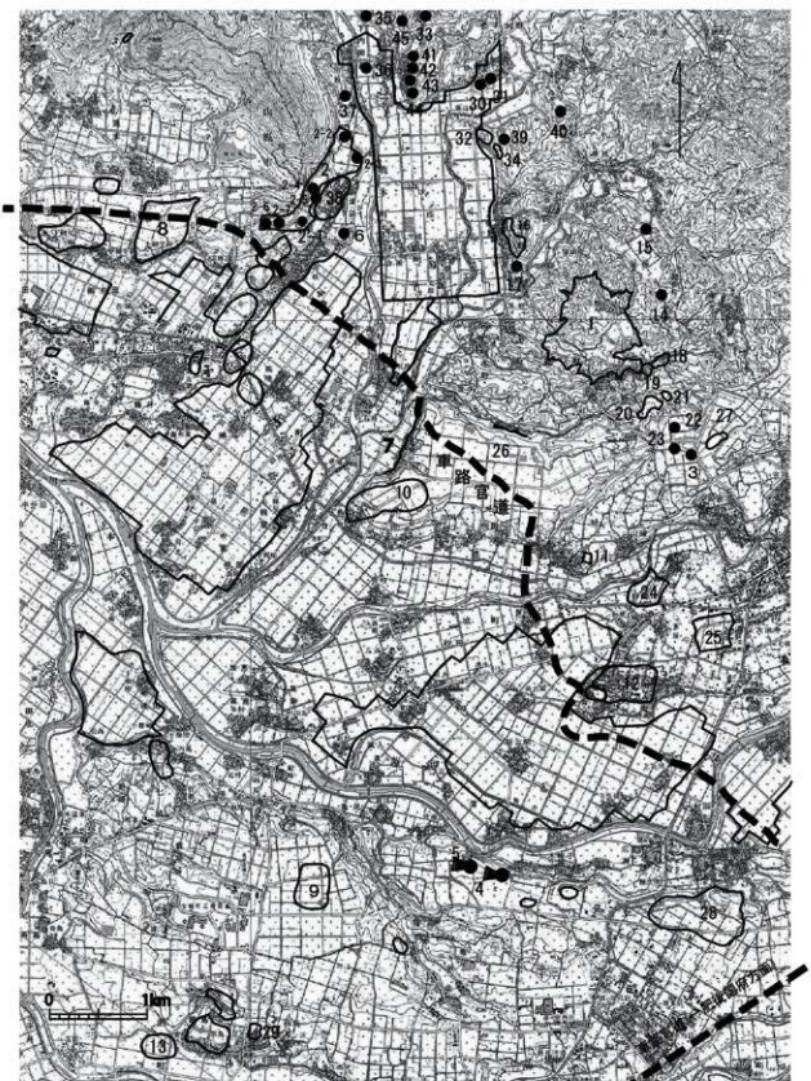
今回調査した上部の版築については、第4章 調査の方法と成果第1節 深迫門跡におけるこれまでの調査概要の第1項深迫門北側土壘線の調査の部分を参照されたい。

第2節 登城道について

門を考えるには、登城道のルートが重要である。第36次調査で28-5トレンチの中央付近で精査時に凝灰岩の角礫を検出した。これが門南側の土壘の前面の敷石であるかは別として、登城道に関わる地業の可能性も考えられた。

土壘の前面に敷石をして土壘造成時には、作業道に使用されたと考えられるが、保護盛土をすれば敷石が隠れてしまう。その前面に門北側の土壘及び南側にルートを推定したい。

28-5トレンチは、土壘前面の敷石を検出してトレンチ中央部をその面で掘て掘削している状況である。28-5トレンチについては、土壘構造の変遷を調べるには北側土壘や南側土壘部分は確實な地山を出すことまた、谷部分の敷石に対応する面とさらに整地面を掘むためにも、盛土から堆積土・確実な地山まで追ってその上層に道路面や整地面を検討することが登城道の方向や門の役割を考える上で、必要である。そのためには、北側土壘と南側土壘の版築が検出されている28-5トレンチのさらなる下層への調査が必要で、それが谷上部の登城道解明のための手段であると考えられる。



1. 駒智城跡 2. 津袋古墳群(2-1. 津袋大塚古墳 2-2. 朱塚古墳 2-3. 平原塚古墳 2-4. 頂塚古墳 2-5. 五社宮古墳 2-6. 茶臼塚古墳 2-7. 小町塚古墳)
 3. 製糸尾高塚古墳 4. 木槵子フタツカサン古墳 5. 木槵子高塚古墳 6. 御塚塚古墳 7. 濱戸口横穴群 8. 御宇田遺跡群
 9. 上鶴頭遺跡 10. うな道跡 11. 十蓮寺跡 12. 西寺遺跡(郡家) 13. 篠原遺跡 14. 鐘掛松古墳 15. 黄金塚古墳 16. 鐘掛松遺跡
 17. 頂塚古墳 18. 山田横穴群 19. 稲作之口道跡 20. 大井種横穴群 21. 大井種谷横穴群 22. 製糸尾丸山古墳 23. 製糸尾茶臼塚古墳
 24. 神来遺跡 25. 条里塚 26. ヒュウガ谷横穴群 27. 稲掛横穴群 28. 医者どん坂遺跡 29. 田島廟寺 30. 陣の釜古墳
 31. 陣の内古墳 32. 銀龜塚古墳群 33. 日渡横穴群 34. 竜口横穴群 35. 谷古墳群 36. 德塚古墳 37. 立山古墳 38. 津袋遺跡
 39. 小追古墳 40. 灰塚古墳 41. 儀兵山古墳 42. 熊崎古墳 43. 熊崎横穴群 44. 山井古墳 45. (上日渡)大塚古墳

図1 駒智城跡周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)



図2 城門跡 位置図 (1/6,000)

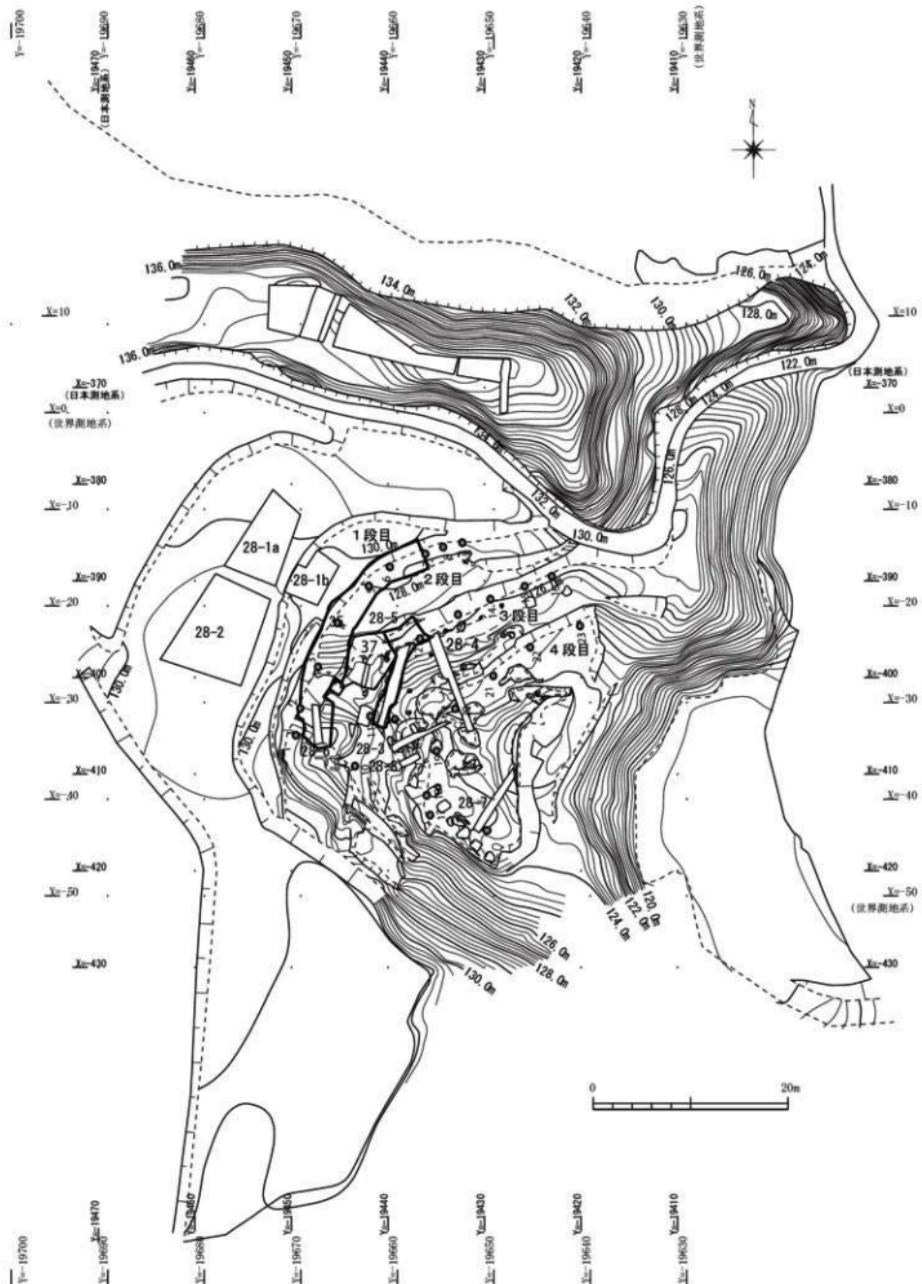
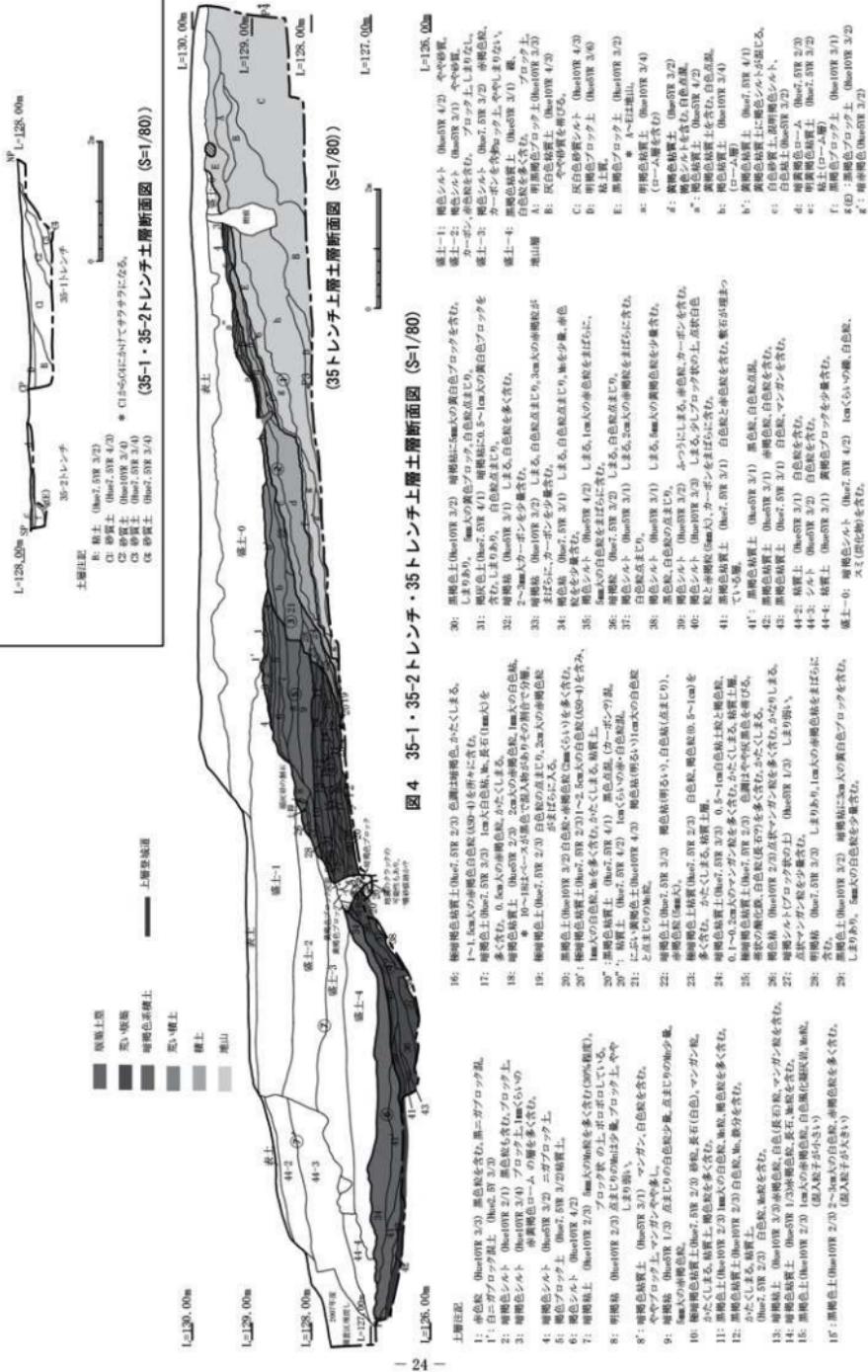


図3 35-1・35-2トレンチ深迫門跡 周辺地形図(1/500)

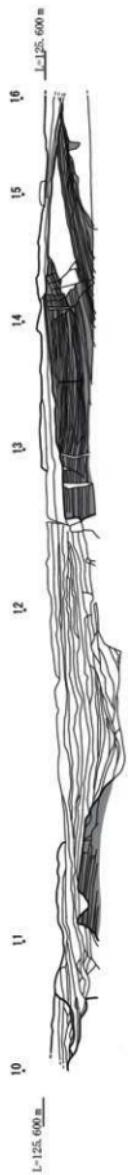


1. 129, 900 m. 2. 129, 900 m. 3. 125, 600 m. 4. 125, 600 m.

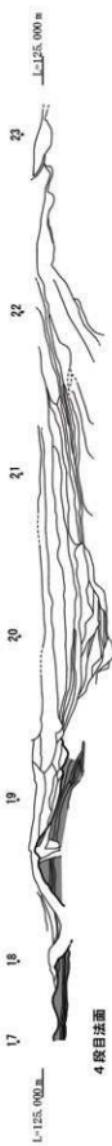
2段目法面

(第16次調査記録)

* 35・36次調査で再調査した図4に差し替え・参照



3段目法面



4段目法面



土壤剖面ポイント位置図

図5 深迫門跡 板岩土壌断面図 1 (1/150)

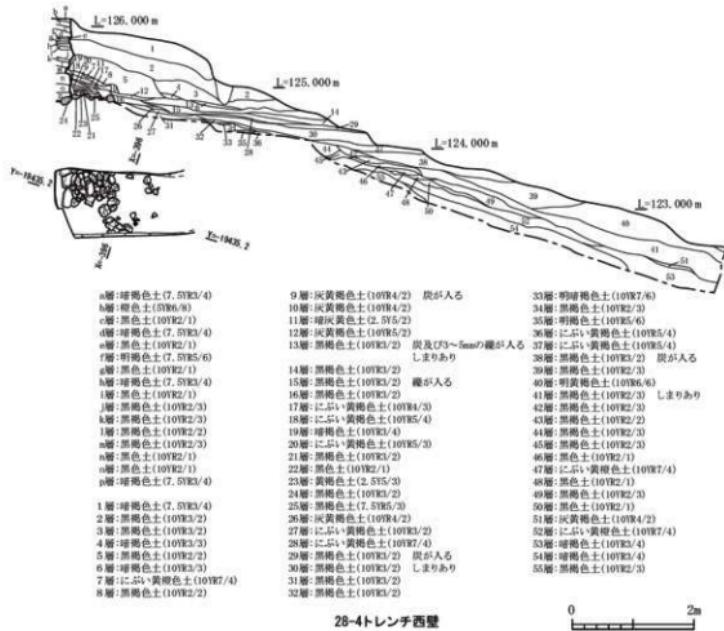


図6 深迫門跡 28-4トレンチ土壌断面図 (1/80)

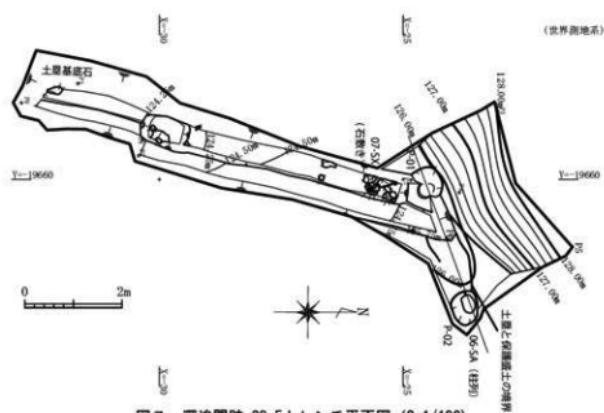
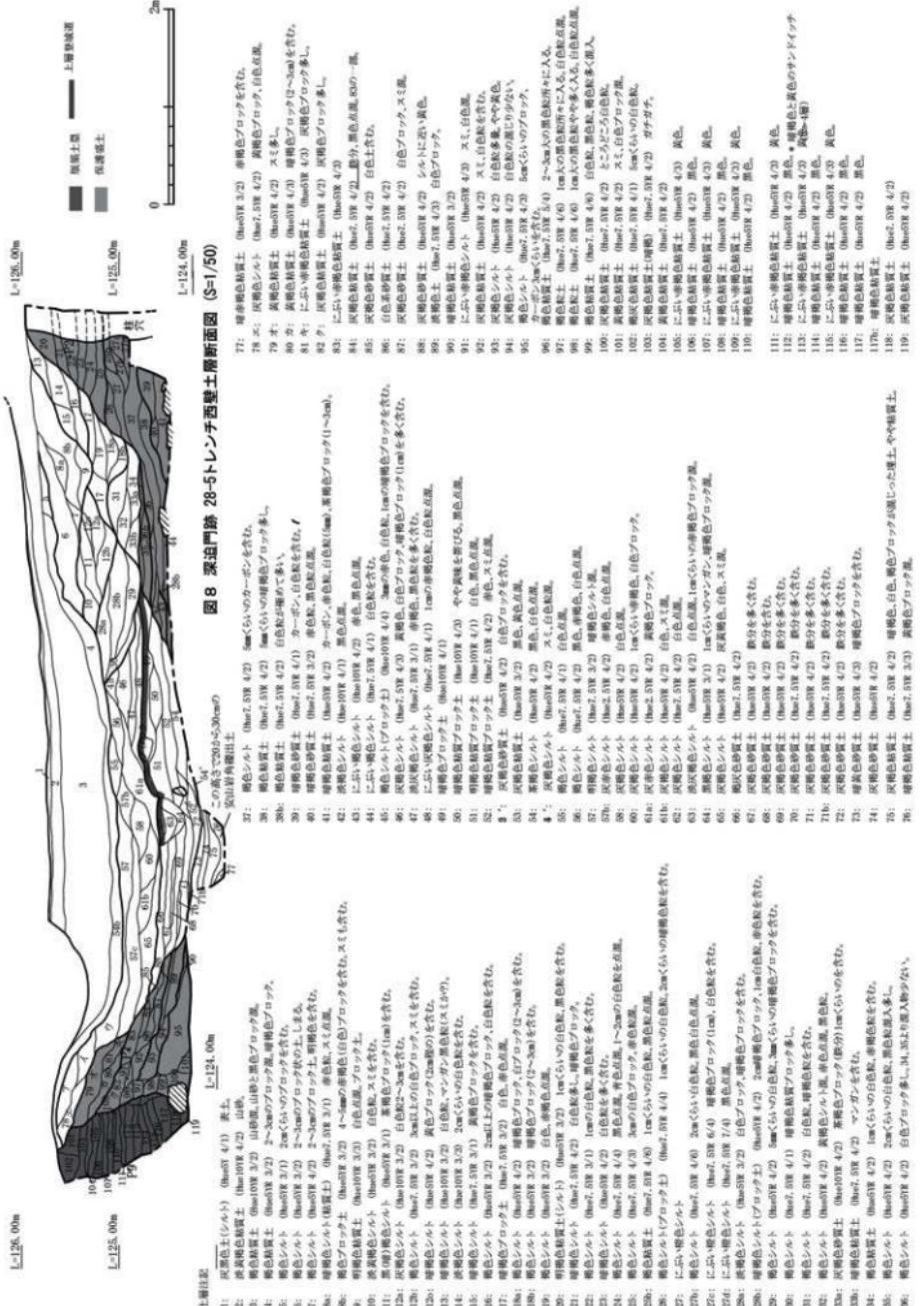


図7 深迫門跡 28-5トレンチ平面図 (S=1/100)



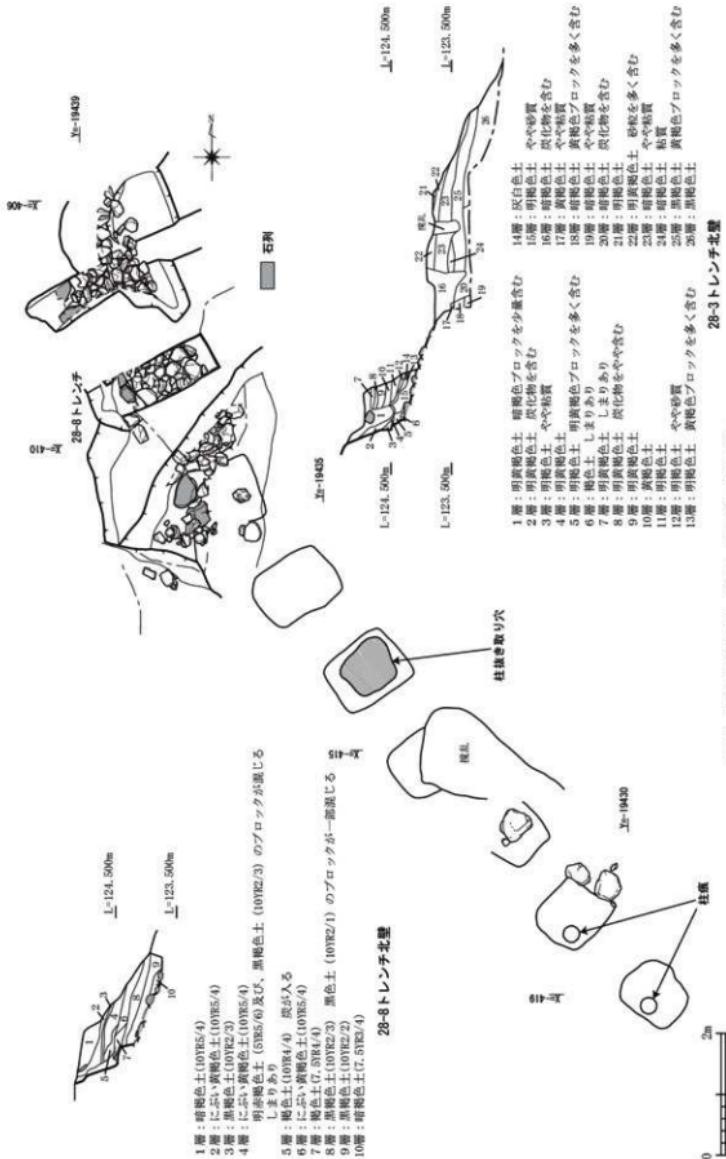


図 9 深追門跡 石列・柱穴・土層断面図 (1/80)

28-9 トレンチ北壁

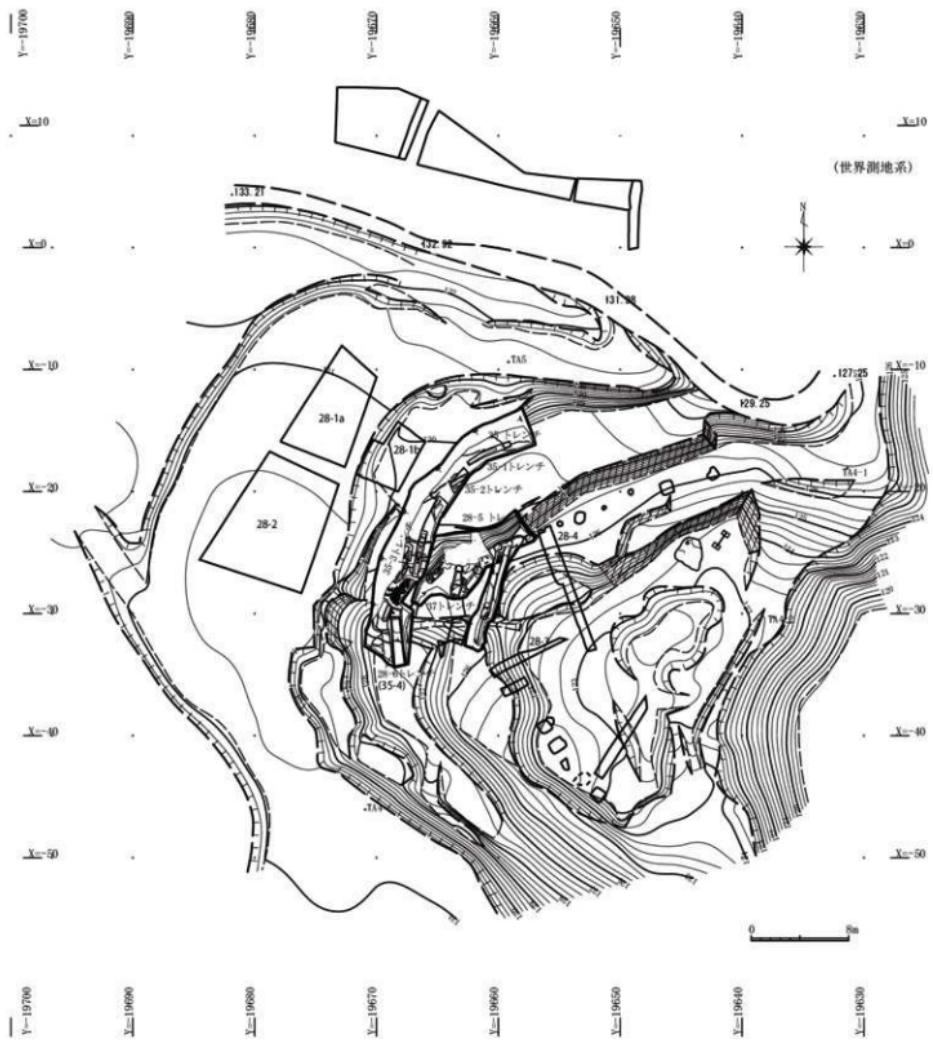


図10 深迫門跡周辺第37次調査時現況トレンチ配置図 (1/400)

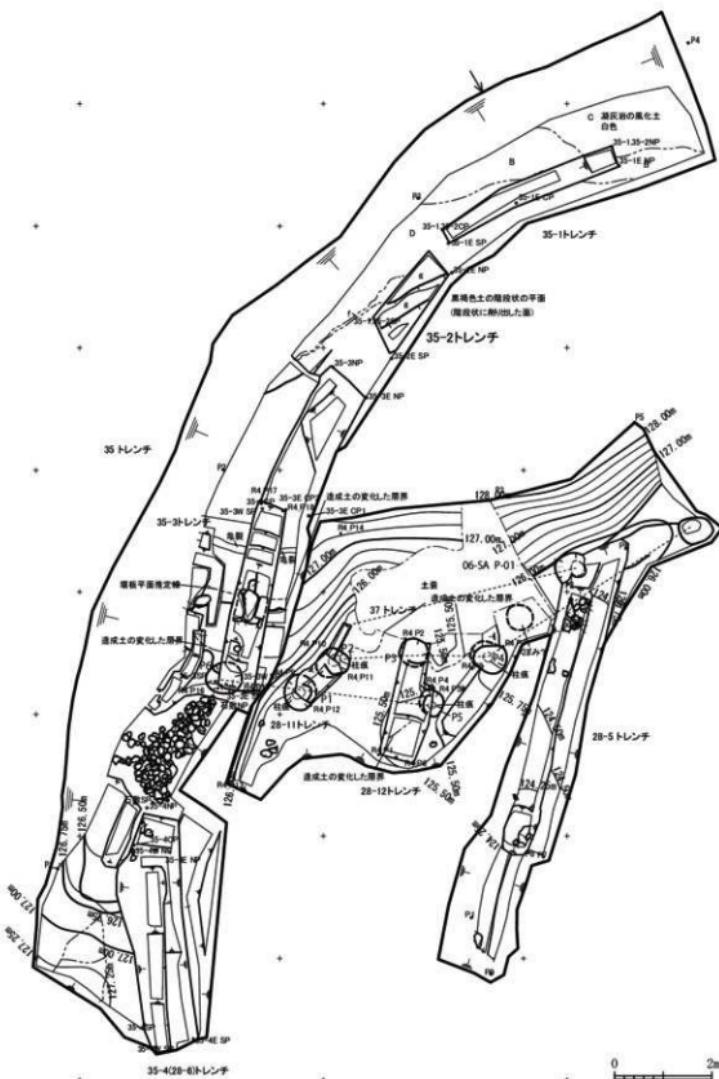


図11 深迫門跡 28, 35, 37トレンチ平面図 (1/100)

X=35
(日本測地)



Y=19445
(日本測地)

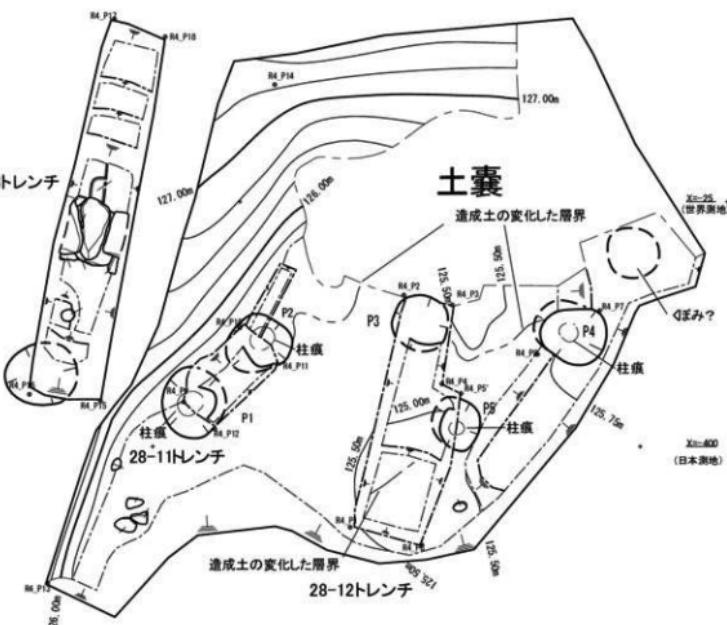
Y=19465
(世界測地)

Y=19440
(日本測地)

X=25
Y=19460
(日本測地)

X=25
(世界測地)

35-3トレンチ



X=400
(日本測地)

X=30
(世界測地)

図12 37トレンチ(28-11-28-12トレンチ)、35-3・28-6トレンチ平面図2 (1/50)

X=405
(日本測地)

X=30
(世界測地)

35-4(28-6)トレンチ

X=35
(世界測地)

Y=19440
(日本測地)

Y=19465
(世界測地)

Y=19440
(日本測地)

X=25
Y=19460
(日本測地)

0 2m

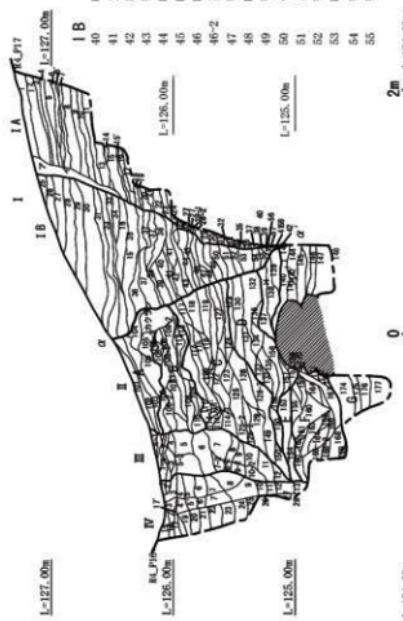
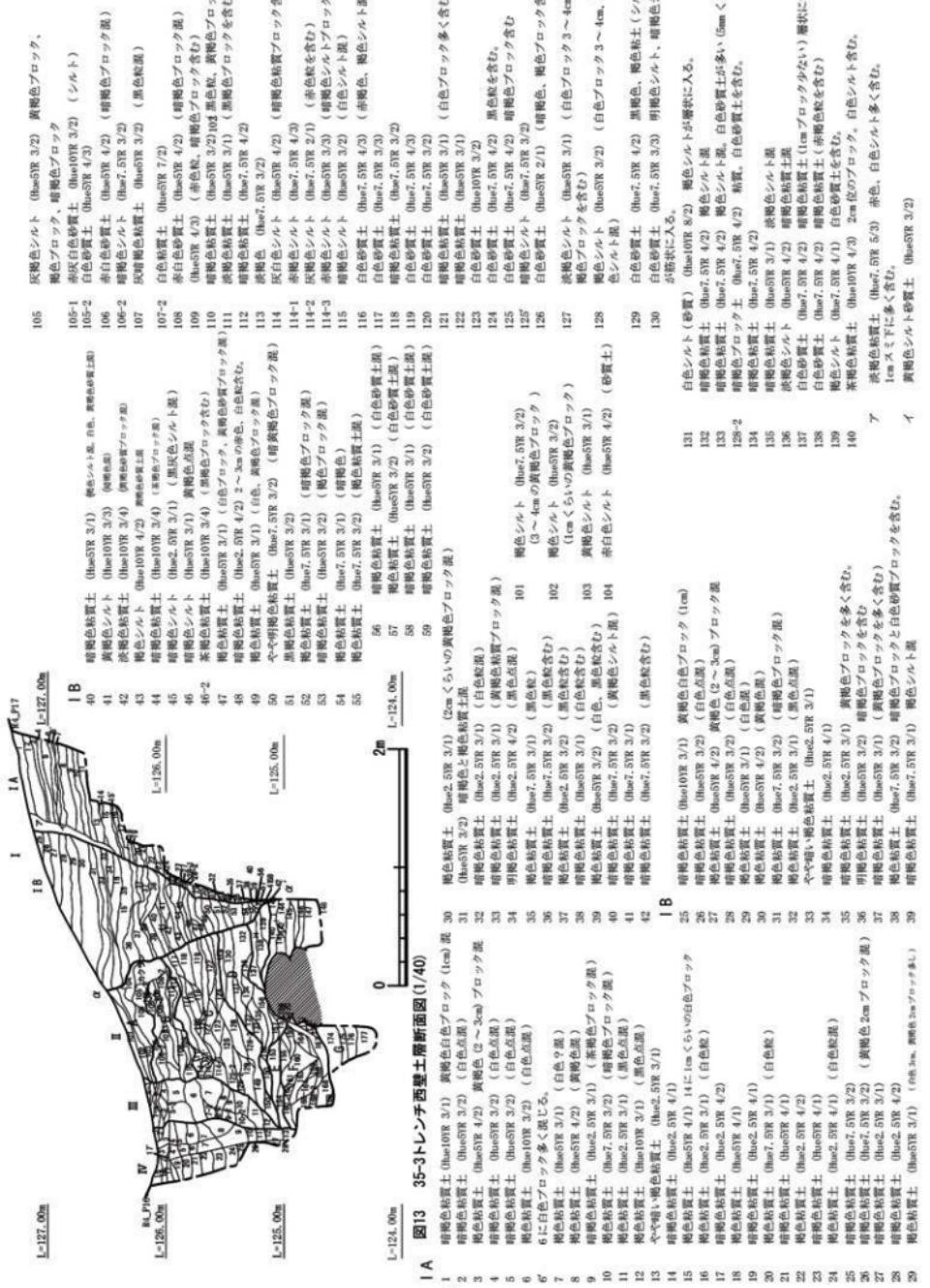


図13 35-3トレンチ西墨土層断面図(1/40)



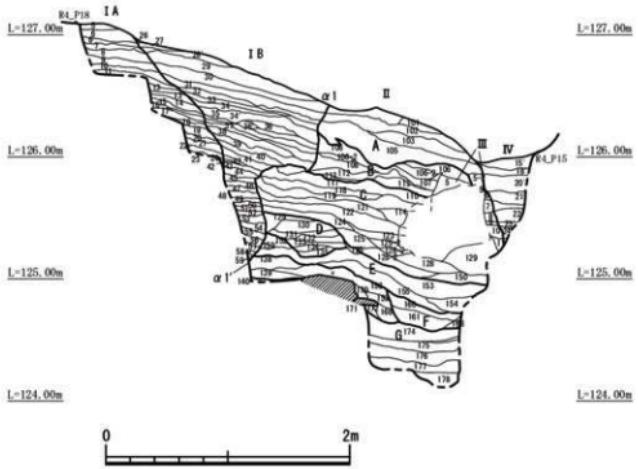
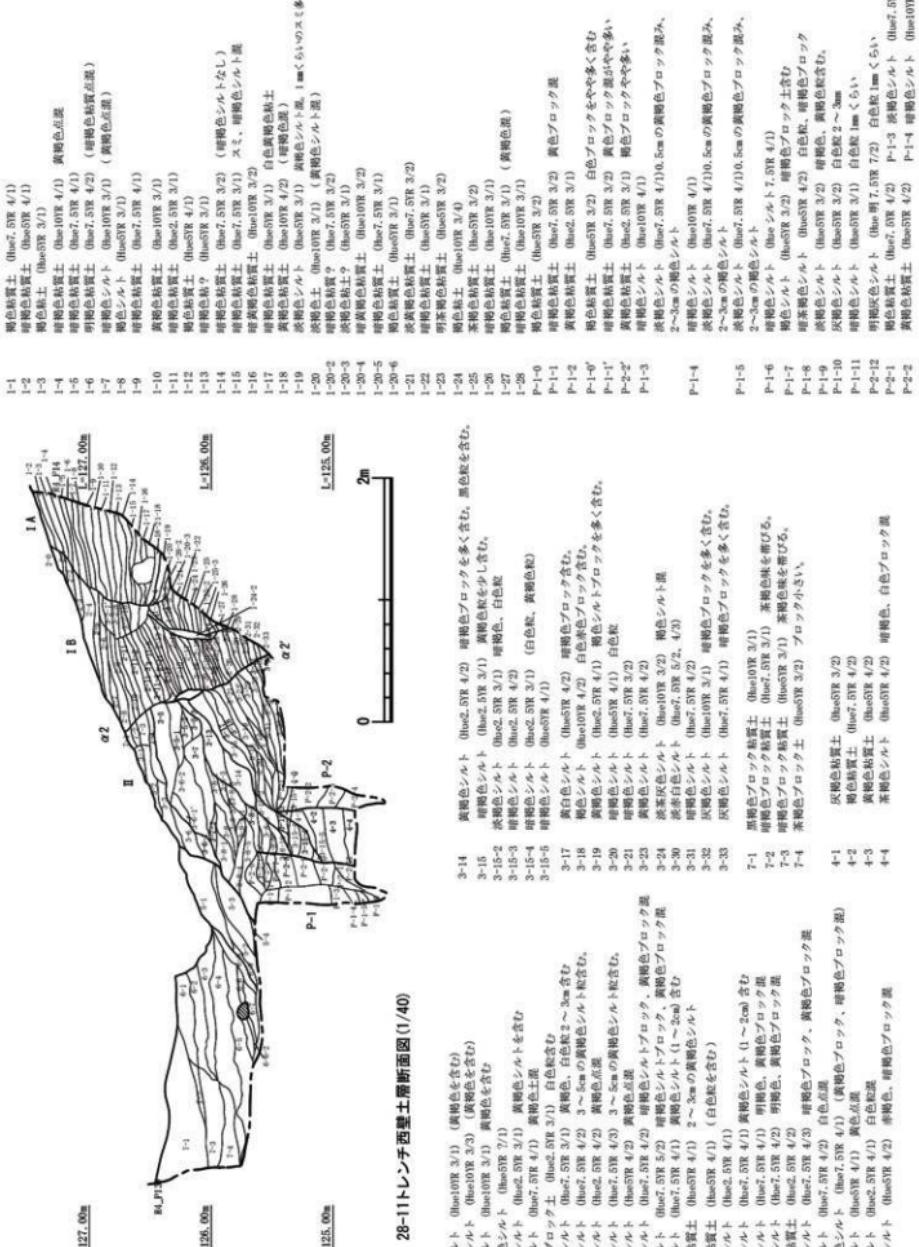


図14 35-3トレント東壁土層断面図(1/40)

141	糊7.5YR 4/2)		III-1	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色土混
142	白色砂質土 (Hue10YR 3/1)		III-1a	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色土混
143	暗褐色粘質土 (Hue10YR 5/1) 間層に赤褐色シルト (厚み2mmの層が入る)		III-2	褐色シルト (Hue7.5YR 3/1) シルト黄褐色土混
144	Hue10YR 5/1)		III-3	黄褐色シルト (Hue7.5YR 4/2)
145	白色砂質土 (Hue10YR 5/2) 黒色粒含む。		III-4	褐色シルト (Hue7.5YR 4/1)
146	やや赤みがかった白色砂質土 (Hue7.5YR 5/2) 暗褐色粘度ブロックをまばらに含む。		III-5	褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色点混
147	暗褐色シルト (Hue7.5YR 4/2)		III-5.2	褐色シルト (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色点混
148	淡茶褐色粘土 (Hue7.5YR 4/2)		III-6	暗褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色点混
149	暗褐色ブロック土 (Hue7.5YR 3/2) (茶褐色ブロック土混)		III-7	暗褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色ブロック混
150	暗褐色ブロック土 (Hue7.5YR 4/2) (淡褐色砂質土混)		III-7.2	暗褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/2 黄褐色点混
151	明褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)		III-8	淡褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/1)
152	明褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)		III-9	暗褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色ブロック土を含む。
152'	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1)		III-10	明褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) (明褐色砂質土混)
153	明褐色ブロック土 (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色シルト混		III-11	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1) 2~3cmの黄褐色ブロックが混じる。
154	褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) (暗褐色ブロック混)		III-12	褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色シルトを含む。
155	褐色シルト (Hue7.5YR 4/3) (暗褐色ブロック混)		IV-1	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色土混
156	暗褐色ブロック土 (Hue7.5YR 4/2) (明褐色砂質土混)		IV-2	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色土混
157	黄褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) 暗褐色1cmくらいのブロック混		IV-3	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1)
158	黄褐色シルト (Hue7.5YR 5/3)		IV-4	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2) 1cmくらいの黄褐色土ブロック混
159	褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色ブロック2~3cmを含む。		IV-5	褐色粘質土 (Hue2.5YR 3/1) 暗褐色ブロック混
160	褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) 暗褐色シルトブロック混		IV-6	黄褐色シルト (Hue2.5YR 3/1) スミ、暗褐色シルト混
161	明褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)		IV-7	暗褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/1) (ブロックを細かく)
162	明褐色砂質土 (Hue7.5YR 4/2) 暗褐色ブロック、白色ブロック混		IV-8	暗褐色粘質ブロック土 (Hue7.5YR 4/1)
163	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1) 黄褐色ブロック混		IV-9	暗褐色シルト (Hue7.5YR 4/2) 黄褐色ブロック土を多く含む。
164	明褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)		IV-10	暗褐色シルト (Hue2.5YR 4/1) (白色、赤色を多く含む)
165	淡褐色粘質土 (Hue7.5YR 5/3)		IV-11	赤褐色粘質土 (Hue2.5YR 4/2) 暗褐色土を混じる。
166	明黄褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)		IV-12	暗褐色粘質土 (Hue2.5YR 4/2) 赤褐色混
167	明褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)		IV-13	褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/2)
168	明褐色シルト (Hue7.5YR 4/2)		IV-14	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)
169	茶褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)		IV-15	褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)
170	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1) 黄褐色ブロック?混		IV-17	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1)
171	白色砂質土 (Hue7.5YR 4/2)		IV-18	黒褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)
172	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2) ややうすい色		IV-19	赤っぽい褐色粘質土 (Hue2.5YR 4/2)
173	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)		IV-20	黒褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)
174	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)		IV-21	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)
175	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2) 暗褐色ブロック混		IV-22	黒褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)
176	暗褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/3) (やや砂質)		IV-23	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/1)
177	暗褐色粘質土 (Hue10YR 4/2)		IV-24	明褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/2)
			IV-25	淡褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)
			IV-26	褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)
			IV-27	黑褐色粘質土 (Hue7.5YR 3/1)
			IV-28	淡褐色粘質土 (Hue7.5YR 4/2)



2-1	褐色粘質土 (5YR 3/1)		2-26	茶褐色粘質土 (Hue10YR 3/2) (白色粒、黃褐色粒)
2-2	暗褐色粘質土 (7, SYR 4/1)		2-27	暗褐色粘質土 (Hue2, SYW 3/1)
2-3	褐色粘質土 (10YR 3/1)		2-28	暗褐色粘質土 (Hue10YR 3/3) やや黃褐色粘質土含む。
2-4	褐色粘質土 (5YR 3/1)		2-29	暗褐色粘質土 (HueSYR 3/1)
2-5	暗褐色粘質土 (7, SYR 3/1)		2-30	明褐色シルト (Hue10YR 3/2)
2-6	褐色粘質土 (7, SYR 3/3)		2-31	暗褐色粘質土 (Hue7, SYW 3/1)
2-7	褐色粘質土 (10YR 3/1)		2-32	茶褐色粘質土 (Hue7, SYW 2/1)
2-8	暗褐色粘質土 (5YR 3/1)		2-33	茶褐色粘質土 (Hue5YR 3/2)
2-9	黃褐色粘質土 (2, SYR 3/1) 暗褐色点混		6-1	やや暗い褐色粘質土 (10YR 3/1) 1cm程
2-10	暗褐色粘質土 (7, SYR 4/2)		6-2	褐色粘質土 (5YR 3/1) 茶褐色シルト混
2-11	淡褐色シルト (7, SYR 4/3)		6-3	暗褐色粘質土 (7, SYR 4/1) 茶褐色ブロック混
2-11-2	黃褐色シルト (5YR 4/1) 暗褐色点混		6-4	褐色粘質土 (5YR 4/1)
2-11-3	暗褐色シルト (10YR 4/1)		6-5	暗褐色シルト (SYR 3/1)
2-11-4	褐色シルト (7, SYR 4/1)		6-6	茶褐色シルト (2, 5YR 3/1) 黃褐色ブロック混。炭泥
2-11-5	暗褐色シルト (10YR 3/1)		6-7	暗褐色シルト (7, 5YR 3/2) 黃褐色ブロック混。炭泥
2-11-6	褐色シルト (5YR 2/1)		6-8	黃褐色シルト (10YR 3/1) 黃褐色点混
2-12	明褐色粘質土 (10YR 4/1)		5-1	褐色粘質土 (2, 5YR 3/1) 黃褐色粒含
2-13	暗褐色粘質土 (5YR 3/1)		5-2	褐色粘質土 (5YR 3/2) 赤褐色・白色ブロック混
2-14	暗褐色粘質土 (2, SYR 4/1)		5-2-2	褐色粘質土 (7, SYR 3/1) 赤褐色混
2-15	黃褐色粘質土 (7, SYR 4/2)		5-3	暗褐色ブロック粘質土 (5YR 3/2) 赤褐色粒混
2-16	暗褐色シルト (7, SYR 3/2) 黄褐色点混			
2-17	暗褐色シルト (10YR 3/1)			
2-18	黃褐色シルト (5YR 3/1) 黄褐色ブロック含む			
2-19	暗褐色シルト (7, SYR 4/1) 黄褐色点混			
2-20	暗褐色粘質土 (HueSYR 2/1)		4-0	灰褐色シルト (SYR 4/2) 黄褐色ブロックを含む
2-21	茶褐色シルト (Hue10YR 3/1) (黄褐色ブロック、暗褐色ブロック混)		4-1	暗褐色シルト (SYR 3/2) 黄褐色ブロックを含む
2-22	明褐色シルト (Hue7, 5YR 3/2) (黄褐色シルト混)		4-2	褐色シルト (SYR 4/2) 黄褐色ブロックを含む
2-23	暗褐色粘質土 (Hue10YR 3/1) (白色粒)		4-3	黃褐色粘質土 (5YR 4/2) 泥を含む
2-24	褐色粘質土 (Hue2, SYR 3/1) (白色粒)		4-4	茶褐色沙シルト (5YR 4/2) 品種無
2-25	褐色粘質土 (HueSYR 3/1) (暗褐色褐色 1 ~ 2mm ブロック混)			

図15-2 28-11トレント西壁土層断面図 土色注記

L=126, 00m

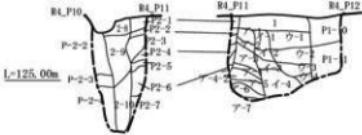


図16 28-11トレント北・東・南壁土層断面図(1/40)

0 2m

1 褐色シルト (HueSYR 3/1)

P-1 暗褐色ブロック土 (Hue2, 5YR 3/1)

A

- ア-1 褐色シルト (Hue5YR 3/2) 暗褐色点混
- 2 暗褐色シルト (Hue10YR 3/2) 黄褐色ブロック土混
- 3 洋明褐色シルト (Hue10YR 3/2) 黄褐色・黄褐色点混
- 4 暗褐色シルト (Hue10YR 3/2) 黄褐色シルト?
- 4-2 黄褐色シルト (Hue5YR 3/2) 褐色ブロック土
- 5 暗褐色シルト (Hue7, SYR 4/2) ややしり多い。明褐色ブロック混
- 6 黄褐色シルト (Hue7, 5YR 4/3) 暗褐色ブロック混
- 7 黄褐色粘質土 (Hue7, SYR 4/2)
- 8 暗褐色粘質土 (Hue7, SYR 3/1)

イ-1

- 暗褐色ブロック土 (粘質土) (Hue7, 5YR 4/1)
- 2 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 4/2)

3

- 暗褐色シルト (Hue7, SYR 3/2) (2, SYR 4/2) (1 ~ 2cm の白色ブロック混)

4

- 茶褐色シルト (Hue7, SYR 4/2) (暗褐色ブロック混)

5

- 明褐色シルト (Hue5YR 4/2)

ウ-1

- 暗褐色ブロックシルト (Hue7, SYR 4/2) (暗褐色シルト、黒色白色点混)

2

- 黄褐色シルト (Hue5YR 4/2) 白色点混

3

- 暗褐色シルト (Hue7, SYR 4/2)

4

- 暗褐色シルト (Hue5YR 3/1)

ピ-21

- 褐色シルト (Hue7, 5YR 4/1)

2

- 暗褐色シルト (Hue7, SYR 3/1) 黄褐色・暗褐色ブロック混?

3

- 暗褐色シルト (Hue7, SYR 4/1)

L=124, 00m

2m

1 褐色シルト (HueSYR 3/1)

P-1 暗褐色ブロック土 (Hue2, 5YR 3/1)

P-1-1 暗褐色ブロック土 (Hue7, 5YR 4/1)

P-1-2 暗褐色シルト (Hue2, 5YR 4/2) 2 ~ 3cmの褐色、0.5cmの黄褐色ブロックを含む。

P-1-3 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 4/1) 2-2と同様の混入。

P-1-4 (Hue10YR 4/1) 暗褐色ブロックを多く含む。

P-1-5 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 4/1)

P-1-6 暗褐色シルト (Hue7, SYR 4/1)

P-1-7 暗褐色シルト (Hue7, SYR 4/1)

P-1-8 淡黄褐色シルト (Hue5YR 5/2) 暗褐色ブロック、黄褐色ブロック混入。

P-1-9 暗褐色粘質土 (Hue2, SYR 4/2) 黄褐色ブロックを含む。

P-1-10 暗褐色粘質土 (Hue7, 5YR 4/1) 黄褐色ブロックを含む。

P-1-11 暗褐色粘質土 (Hue2, SYR 4/2) 黄褐色ブロックを含む。

P-2-1 暗褐色粘質土 (Hue2, SYR 4/2)

P-2-2 暗褐色粘質土 (Hue2, 5YR 4/1)

P-2-3 暗褐色粘質土 (Hue2, SYR 3/1)

P-2-4 暗褐色粘質土 (Hue5YR 3/1)

P-2-5 暗褐色粘質土 (Hue5YR 4/2)

P-2-6 灰褐色シルト (Hue5YR 3/2) 黄褐色シルト混。

P-2-7 黄褐色粘質土 (Hue2, 5YR 3/1)

P-2-8 暗褐色ブロック土 (Hue5YR 4/2)

P-2-9 暗褐色シルト (Hue5YR 4/1) 黄褐色シルト混。

P-2-10 黄褐色粘質土 (Hue2, 5YR 3/1)

L=126, 00m L=126, 00m

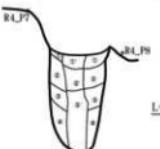


図17 P-4土層断面図(S=1/40)

① 褐色シルト (Hue7, SYR 3/2) 白色シルト混

② にぶい褐色シルト (Hue7, SYR 5/4)

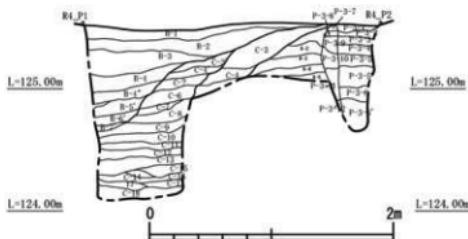
③ 褐色シルト (Hue7, SYR 4/3) 白色シルト混

④ 暗褐色シルト (Hue7, SYR 3/3)

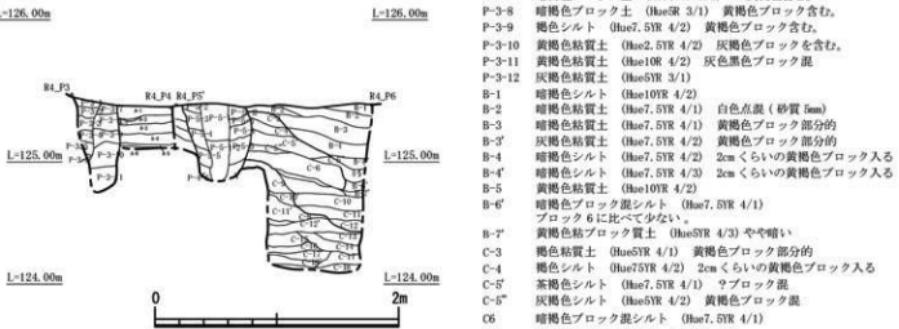
⑤' 褐色シルト (Hue7, SYR 4/4)

⑦' にぶい褐色シルト (Hue7, SYR 5/3)

⑨' 暗褐色シルト (Hue7, SYR 3/4)



- A-1 暗褐色シルト (Hue2, STY 4/2)
- A-1' 暗褐色シルト (Hue7, STY 3/2)
- A-2 暗褐色シルト (Hue7, STY 3/1)
- A-3 暗褐色シルト (Hue2, 5YR 4/3) 黄褐色、白色混
- A-4 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 3/1) 喙褐色ブロック 5mm 含む。
- A-5 茶褐色シルト (Hue2, STY 4/1) 喙褐色、赤褐色多く含む。
- A-6 暗褐色シルト (Hue5YR 4/1) 喙褐色、赤褐色多く含む。
- P-3-1 暗褐色シルト (Hue7, STY 4/2)
- P-3-2 暗褐色ブロック土 (Hue7, STY 4/1)
- P-3-3 暗褐色ブロック土 (Hue5YR 3/1) 黄褐色混
- P-3-4 暗褐色シルト (Hue5YR 3/1) 流泥り少ない
- P-3-5 暗褐色ブロックシルト (HueSTY 4/1) 黄褐色ブロック
- P-3-6 暗褐色ブロックシルト (HueSTY 4/1) 黄褐色ブロック
- P-3-7 暗褐色ブロック土 (HueSTY 3/1)
- P-3-8 暗褐色ブロック土 (Hue10YR 4/2) 黄褐色含む。
- P-3-9 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 4/2) 黄褐色ブロック含む。
- P-3-10 黄褐色粘質土 (Hue2, STY 4/2) 灰褐色ブロックを含む。
- P-3-11 黄褐色粘質土 (Hue10YR 4/2) 灰色黑色ブロック混
- P-3-12 灰褐色粘質土 (Hue5YR 3/1)
- B-1 暗褐色シルト (Hue10YR 4/2)
- B-2 暗褐色粘質土 (Hue7, STY 4/1) 白色点混 (砂質 5mm)
- B-3 暗褐色粘質土 (Hue7, STY 4/1) 黄褐色ブロック部分的
- B-3' 灰褐色粘質土 (Hue7, STY 4/2) 黄褐色ブロック部分的
- B-4 暗褐色シルト (Hue7, STY 4/2) 2cm くらいの黄褐色ブロック入る
- B-5 暗褐色粘質土 (Hue10YR 4/2)
- B-6 暗褐色ブロック混シルト (Hue7, STY 4/1)
- B-7 黄褐色粘質土 (HueSTY 4/3) 4mm 以下で少ないと
ブロック 6mm 以上で多い。
- C-3 暗褐色粘質土 (HueSTY 4/1) 黄褐色ブロック部分的
- C-4 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 4/2) 2cm くらいの黄褐色ブロック入る
- C-5' 茶褐色シルト (Hue7, STY 4/1) ?ブロック混
- C-5" 灰褐色シルト (Hue5YR 4/2) 黄褐色ブロック混
- C-6 暗褐色ブロック混シルト (Hue7, 5YR 4/1)
- C-7 黄褐色粘質土 (HueSTY 4/3)
- C-8 明褐色シルト(粘質) (Hue5YR 4/2) 暗褐色ブロック混
- C-9 暗褐色ブロック混シルト (Hue7, STY 4/1)
- C-10 暗褐色シルト (Hue10YR 4/2) 下層に黄褐色シルト
- C-10' 灰褐色シルト (Hue10YR 4/3) 下層に黄褐色シルト
- C-11 暗褐色シルト (Hue2, STY 4/2) やや明るい
- C-11' 暗褐色シルト (Hue5YR 4/2) やや粘質
- C-12 暗褐色粘質土 (Hue7, STY 4/1)
- C-12' 黑褐色粘質土 (Hue7, STY3/1)
- C-13 暗褐色粘質土 (Hue2, STY 4/1) スミが入る。粘度高い。
- C-14 暗褐色粘質土 (Hue2, STY 4/2)
- C-15 暗褐色粘質土 (Hue2, STY 4/1) やや暗め
- C-16 暗褐色? (Hue5YR 4/2)
- C-17 暗褐色ブロック土 (Hue7, STY 4/1)
- C-17' 灰褐色粘質土 (Hue5YR 4/2)
- C-18 黄褐色粘質土 (Hue2, STY 4/2)



- P-5-1 暗褐色粘質土 (Hue2, 5YR 5/2)
- P-5-1'2 暗褐色シルト (Hue7, STY 3/1)
- P-5-2 暗褐色ブロック土 (Hue2, STY 4/2)
- P-5-3 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 4/2) 黄褐色シルト混
- P-5-4 暗褐色シルト (Hue7, 5YR 3/1) 赤褐色粘土塊入る
- P-5-5 暗褐色ブロック粘質土 (Hue2, 5YR 3/1)
- P-5-6 暗褐色粘質土 (Hue10YR 3/3)

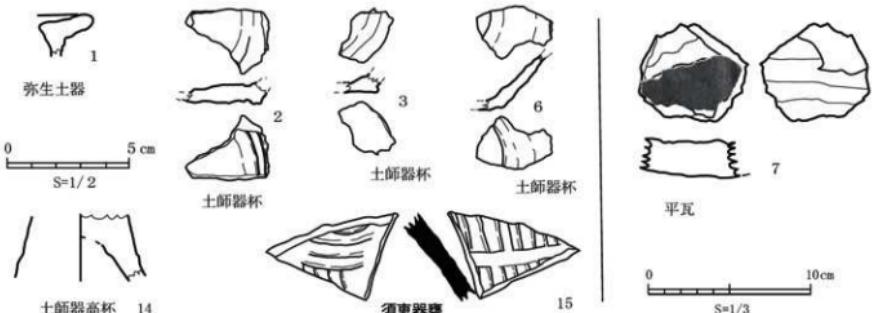


図20 35トレンチ北壁(1~6)・集石内(7)・28-6トレンチ(14~15)遺物実測図(土器(1/2)・瓦(1/3))

*遺物番号は表1の観察表による

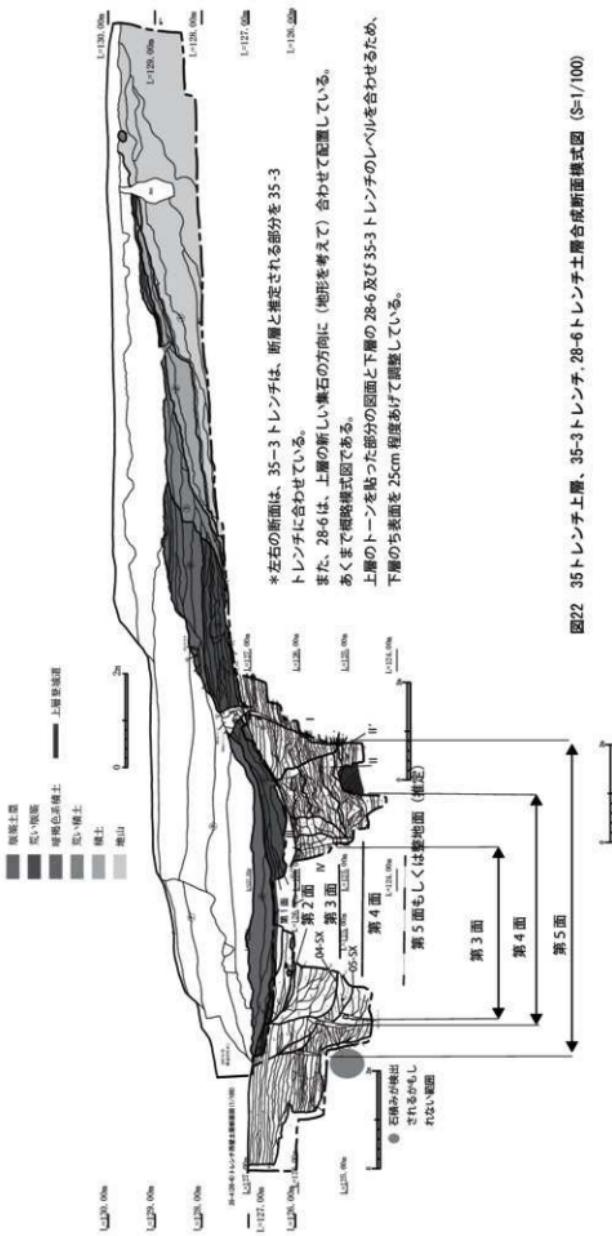


図22 35 レンチ上層、35-3 レンチ、28-6 レンチ土層合成断面模式図 (S=1/100)

写 真 図 版



1 第37次発掘調査調査区遠景（南東から）



2 調査区遠景（北西から）



3 37トレンチ近景（南から）



4 35-3トレンチ石積み・版築検出状況（南東から）



5 37トレンチ検出状況（東から）



6 35-3トレンチ石積み・西壁版築断面検出状況
(南から)



7 35-3トレンチ石積み・版築検出状況（南東から）



8 28-6トレンチ検出状況（北から）



9 北側土塁・35-3・37・28-5トレンチ検出状況（南から）



10 37トレンチ検出状況（南から）



11 28-11トレンチ上層（37トレンチ西壁）版築断面検出状況（北東から）



12 28-6トレンチ版築断面西壁版築断面検出状況（東から）



13 28-6トレンチ南側断面検出状況（南東から）



14 28-12トレンチ検出状況（南東から）



15 28-11 トレンチ北端 (PI東から)



16 35-3 トレンチ石積み出土状況 (南から)



17 第37次調査区全景 (東から)



18 35トレンチ上層出土遺物 1



19 35トレンチ上層出土遺物 2



20 35トレンチ上層集石付近出土遺物



21 35トレンチ上層集積凹面布目・板状圧痕



22 28-6トレンチ出土遺物



23 35-3トレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きくちじょうあと							
書名	鞠智城跡							
副書名	第37次調査報告							
巻次	25							
シリーズ名	鞠智城跡文化財調査報告							
シリーズ番号	12							
編著者名	亀田 学							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8570 熊本県中央区水前寺6丁目18番1号 TEL 096-383-1111							
発行年月日	令和5年（2023年）3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
鞠智城跡 (第37次)	熊本県菊池市 木野字深迫	43208	100	33度 00分 10秒	130度 47分 00秒	20220527 ～ 20220831	35m ²	遺跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鞠智城跡	城館	古代	城門 土壘	須恵器 土師器 布目瓦	基底石（積み石）及び柱穴列を伴う 版築土壘に接続する城門			
要約	第35・36次調査に引き続き、鞠智城跡の南東に位置する深迫門跡を発掘調査した。 第37次調査では、門道から北側土壘にかけて柱穴を検出した。柱間距離は不規則である。しかし、2段階の柱配列が考えられる。 第36次調査で検出した3段の石積みの性格は、不明な点が多い。しかし、第37次調査の結果、北側や南側土壘の基底石や土壘前面の敷石とは様相が異なることが判明した。深迫門周辺の地盤に伴うものと推定される。また、3段の石積みの上部の版築は、門道の改修に伴うものと考えられる。 南側土壘は、階段状に地形を造成してから版築していることが判明した。							

鞠智城跡文化財調査報告 第12集

鞠智城跡 —第37次調査報告—

発行年月日 令和5年（2023年）3月10日

編集・発行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本県中央区水前寺6丁目18番1号

印刷・製本 株式会社トライ

〒861-0105 熊本県北区植木町味取373-1

この電子書籍は、鞠智城跡 第37次調査報告 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡 第37次調査報告

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2023年3月23日